

辨榮聖者
光明大系

炎王光

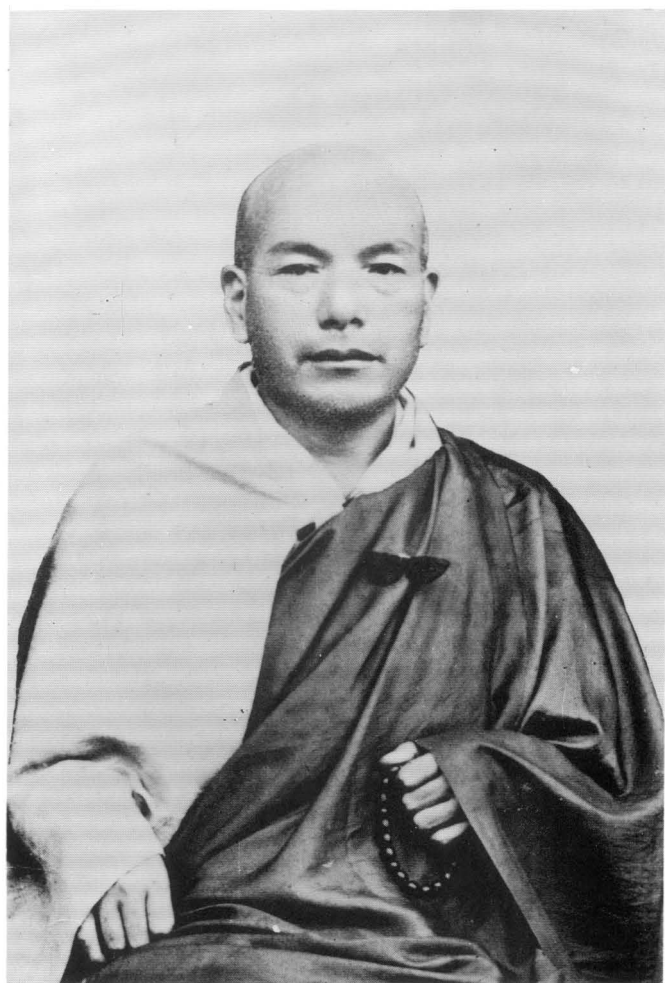
光明大系

炎王光・清淨光・歡喜光・智慧光・不斷光

卷頭お写真説明

(1) 辨榮聖者尊影 大正元年秋 別府市新善光寺にて

(2) 智慧光道詠



光明大系

炎王光・清淨光・歡喜光・智慧光・不斷光

卷頭お写真説明

(1) 辨榮聖者尊影 大正元年秋 別府市新善光寺にて

(2) 智慧光道詠

聖光

宝永四年甲子三月廿五日

信好生此より信好生此より

禁

智慧光佛

如來智

慧乃

光明

光明
光明



光明

佛
不見我

光明

聖
系

真
理

光明

不爾光

日あらはにふたふたの光

おの光ふたふたの光

難思光佛

玄深難思
乃光明地

主心新办

念在道聲



信心喚起乃

雲

何處

心之所在

為

七
光
乃
乃

妙
乃
乃

如
乃
乃

吾
解
光
佛

龍
乃
乃

龍
乃
乃



妙
乃
乃

乃
乃
乃

乃
乃
乃

乃
乃
乃

親 仲 久 乃 之 母 子 母 乃 乃
身 親 女 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

署名

前 篇

衆生無始の無明より
惑と業苦の極なきも
大燄王の光にて
一切の障り除こりぬ

大御親

宇宙には一切萬物の中に萬物の大本となる大ミオヤ在ります。此大ミオヤを信じて之に歸命信順するのが宗教である。我佛教では、釋尊は形は人間に身を受け給ひしかども其御本體は宇宙の中心本尊にして本有常住の法身佛に在ります。其法身より身を分けて此の娑婆世界に御出ましなされたのである。

故に釋迦尊は形の上より拜すれば人間の佛なれども其の御精神の内に入つて見れば宇宙全體が釋尊の心なので其中心に盧舍那如來（るしやなによらい）と云ふ無量の相好光明を以て普く十方世界を照し給ふ御靈體在ります其靈體のルシヤナ如來と肉體形の上に現れし釋尊とは外より見れば別のようなれども其の内面に入つて見れば一體に在ります。故に釋尊は其の内観の一體なるよりして三界は我有で其中の衆生は悉く皆吾子であるとのたまひぬ。一切衆生は其の毘盧舍那（びるしやな）と云ふ法身佛の分れたる子である佛性を有つて居る。けれどもまだ子は赤子のやうなものにて佛の性は具えて居るけれども、いまだ御育てにあづからざれば佛の子としての働きは出來ぬ。

ともあれ如來は我等が眞の大御親に在ませども久遠劫來（くゑんとふらい）大ミオヤと離れて只此肉體のみを愛して心霊が御育てにあづかる事を知らずして乃至今日に至りて淺ましき凡夫の身と成つて居る。實に慚恥すべきである。幸に釋尊が大ミオヤの現はれとして此世に出で給ひもつばら大ミオヤに歸命せよと絶叫し給ひし御教に遇ふことを得しは實に眞に幸福である。

然るに世には一の大ミオヤの在ますことを知らず唯だ我見我慢のみを増長して今現に此の肉體の生活をして居るのも全く大ミオヤが天地萬物の設備を以て我等を活して下さることを何とも思はで、只自分勝手の我見許りを張つて居る者の多いのには、大ミオヤに對して申譯なき次第である。

世の中に親なき子程憐むべきものはない。況んや靈の大ミオヤを識らずして人生を闇黒裡に葬つてしまふもの程憐むべきものはない。

幸に我等は大ミオヤの招喚の御聲に驚きてミオヤに歸命し日々慈悲の乳房を含め哺育せられて益々大ミオヤの在ますことを眞に信認し得らるゝようになりしことは偏にミオヤの御慈悲の然らしむる所と想へば何とも辱なし。されば一切の同胞衆が大ミオヤの在ますを識らずして生涯を闇の中に葬つて仕舞ふのを見れば何とも憐れ同情に耐へぬ。いかにかけて大ミオヤの御手にすがるやうに勧めず

は居られぬ。されば世の同胞衆よ。すべて靈あるものは悉く我子であると仰せられし如來の聖意を畏み體せられよ。

あなたの前に在ます大ミオヤ

大ミオヤは天地間何れの處にも在さざる所なき大ミオヤなれば、今現に此處に在まして、大慈悲の面をあなたに向け給ふて在ます。あなたは信じて居ますかまた信じませぬか。釋尊は如來是法界身、一切衆生の心想の中に入り給ふと仰せられた。宇宙全體に周遍する所の靈體に在ませば何れの處とて在まざる所なく一切衆生の心想の中に入り給ふなれば、君はいかに注目して如來を見奉らんとおもふも、如來を見奉る事は太陽または月をおがむやうに初から外界に心を注いでもおがめませぬ。

本如來は絶對の靈體にして大智慧の心として一切處に遍滿し給ふ。只あなたが一心に念佛する時あなたの心靈に入り而して之を投映する時に客體化して現じ給ふ。

近 縁

如來の眞法身と念佛者の心とは最も近い。どんな物よりも近い。いかにとなれば一室に在つて障子を隔つればも早や室外は雲外萬里の隔てがある。またそれよりは自分の掌も若し閉目してまふた一枚隔つる時は掌中の物も見えぬ。然るに我等念佛者の心眼の前には虚空遍滿の法身が扉を閉ぢたる中に於ても明瞭に見えて、それよりは近く、たとへ閉目しても了然と見ゆる。されば驗の中よりも近い。之は直觀的に吾人の心靈と如來とは實には一體不可離の關係を以て炳現して居る。實に近縁（どんな）である。唯だ內心念佛なくして唯形のみに求むる如きは十萬億土のみにあらず實に無限の隔てがある。

中 心 本 尊

大ミオヤは三身に分れて在ますと雖も元は一體である。法身としては天地萬物の本體にして一切生を生み且つ活して下さる御働にて報身佛は私共の法身から受けたる靈性を開發し又煩惱を靈化する爲に智慧と慈悲との光明を以て念する衆生を攝化し給ひ、應身としては人間世界に御出ましになつて人類にミオヤの聖意を教へ給ふのである。故に歸する所は一體の三面に過ぎぬのである。

大ミオヤよりうけたる佛性は自分の力で之を開きて圓滿なる德を顯すことは出来ぬ。又自己の煩惱の惡質を自分で解脱して完全なる道德と靈化することも出来ぬ。佛性を開發し煩惱を靈化して圓滿なる人格とならんには報身無量光如來の光明を仰がねばならぬ。故に報身佛が最も尊いので宗教の中心本尊は報身佛である。

ミオヤの御答

大なるミオヤは十方法界を遍く照し、わけて御名を呼びて頼む者に答ふる心光を以て、心靈に靈妙の響を與へ給ふ。さればあなたが一心に餘念なく稱名する時、あなたの一心彌陀に對して真正面に心

を向けて念する時はあなたの眞正面に在ますミオヤはまた眞正面にあなたに答ふるに靈なる響を以てす。

あなたに御答が如何に聞え上げられますか。それともまた御答の聲が確と聞え上げられませぬか。御答の響が感ぜられませぬか。もしあなたが聞えぬと云はゞ、そは何故に聞えぬのでせう。ミオヤはあなたを眞實に愛して在ますことなれば、能くもやるせなき親心を汝は思ひつきしぞ、眞實に汝が眞ごころから吾ミオヤよと云ふて呉れよかしと忘るゝ間はなきに、能くも我名を呼んで頼む心を發せしことよと思召す如來に在ませば、何ぞあなたの稱名に御答なき筈はない。かような譯なれば必ず御答は有る筈なれども、あなたがよそ心の爲めに御答を自分と聞きはづして居るのかと思ふ。實に甚深微妙なる御答の響は、そりやくな思を以ては聞え上げられぬ。

私には御名を呼び上る毎に微妙の靈感を以て答ふことなれば、ましてあなたに對して御答ない筈はない。然れば如何に心を致して御名を呼び上ぐれば、ミオヤの御答の響が聞え上げられるであらうとなれば、私は斯やうに心を至して念じ上げ、また御答の響が聞え上げられます。

眞實に如來様は私の眞正面に在すことを信じ、深く念ひ上げて、ナムアミダ佛と餘念なく、己が心

の統一するまで念佛して居りますと、漸々に心も靜りて餘念なく、只如來さまの御慈悲の面かげが自づと彷彿として思はれて來る時に、何とも云はれぬ辱けない有り難さの靈感が感じられて來ます。これぞ如來の靈妙の御答は耳には聞えぬが、直覺的に心に聞えられるのであります。

あなたも斯やうに念を用いて一心に心を至して念佛して眞正面の如來に向つて念じ上げ何時までも心の統一するまで念佛し、如來の靈響を聞き給へ。始めの程は仲々二時間も三時間もかゝつてもそれはあなたの一大事のことですから辛抱なされ。段々に時間が短くも統一が出來て益純熟するに隨つて遂には念佛しさへすれば、忽ちに三昧に入つて如來の靈響に充たされる妙境に入ることが出來て來ます。之即ち感應同交と申します。此の感應同交が宗教の唯一の機關であります。若し感應の聞えぬは古人が、祈りてもしるしなきこそしるしなれ、己が心に誠なければ。

誠の内容

誠に消極と積極の兩面あり。只偽らざるばかりの消極的計りで積極の價值はない。積極的の誠とは

内容の充實したる所にある。内容を充實せしめんには至誠心に彌陀を信じ、彌陀を愛し、世つぎたらんと欲望し、其の内容の充實する所に價值あり。譬へば稻の果が實りて成熟せし如くに内容が出来てこそ眞の誠で、果が充實し成熟せし種子は播いても能く萌生々育す。我々が心靈も全く彌陀に成熟する時は淨土に生るゝ。種が熟せし如く生産作用の能力を具有したならば眞の價值ある誠である。誠は形式即ち容器である。即ち彌陀の靈德を受容する容れものである。その容れ物たる誠の心がなければ受けたる徳も失つてしまふ。

如來を眞實に信ず。信は信受と申して如來の眞實を我心に受容するは信である。彌陀の眞實を信受する時は凡夫の身は卑しくも、至心の内に宿れる彌陀の聖種は實に尊い。經に喩を以て、婢女（めしつかい）に轉輪王の聖胤（たね）を宿す時は、卑女の腹は卑賤なれども内にやどれる胎子はやがて輪王となるべき聖德を有つて居る。其の如く今凡夫は愚かなれども其信心に宿れる彌陀の聖種は後にはやがて不退の菩薩として無上覺位に入るべき性を具して居る。

斯の如くに我に聖種を賜る彌陀聖王に對しては實に愛樂（あいげう）せざるを得ぬ。また我等が愛の對象たる彌陀は最も圓滿に完全なるすべてに超えた人格でなくてはならぬ。宇宙間に唯一無比でなく

てはならぬ。若しもより以上の人格者實在すと聞く時は或は我等が心は動かざるを得ぬ。より以上の人格に心を還らざるを保し得ぬ。故に我等が彌陀は威神光明最尊第一にして而も智慧と慈悲と及び一切の萬徳圓滿して一切諸佛に超へたる大靈的人格として神尊として尊敬すると共に滿腔の愛を捧げて彌陀を愛し敬して居る。すべてに超えし愛を以て只彌陀に容れられんとして居る。愛は生命である。然れば即ち彌陀は我靈の生命の源である。彌陀の靈格を愛慕して忘れんと欲するも忘るゝ能はざる愛樂である。

毎日／＼東の海の清き水を以て面を清め洗ひながら昇る朝日の白いのを見ても直ちに最愛する所の彌陀の慈顔を思ひ出さざるを得ぬ。信ありて愛なきは甘味がない澁みがない。我と彼との間に血が通はぬ。さればあなたの心の奥に彌陀愛樂の溫みと聖き血とが我と彼との間に通うて居りなさるか。忘れんと欲すと雖も忘るゝ能はざる爲に身をも命をも惜みやはずると云ふやうな愛がありや否や。彌陀を愛慕して、若彌陀の御心に叶うなら寧ろ死する方が苦がなくなつても足らぬでせう。されどそれ程に現れ居らぬまでも心の底には愛して居ると認めて居る。

何となれば今現にあなたの信念の生命は彌陀に依つて未來永劫をかけて生命として居る。あなたは

とまれ如來の實在を信じてそれをあなたの永恒の生命として永恒の我なる生命は彌陀に在る事と信じ愛して今現に生きて居るのでせう。爰に於て若しも彌陀尊と云ふものは實在せぬと云ふ確乎たる證據が發見したならば、あなたの永恒の生命と頼みたる心はいかになつてしまふのでせう。それこそ落膽失神してしまふのでせう。あなたは其の場合にさほど落膽しませぬか。若し彌陀の實在を全く否定するゝ事實が到來したならばあなたは精神的に死ぬでせう。彌陀の靈光明につながる生命にして前途永遠の光明として居る生命におつとり割斷せられてしまつたならば如何なるでせう。それでも此の肉の生命さへあればよいと平然としてすまして居られるでせうか。若しも其の場合平然として居らるゝならば、あなたは本より心の奥底に彌陀とつながる愛の生命が生きて居らぬ故であります。

かやうなぐあひにあなたの心の奥底に最大の生命として彌陀尊を愛して居るに相違ないに其の愛が内証して居つて愛の熱が發しきれぬのかも知れぬ、或は其の内証して居る所に却つて病氣が重いのかも知れぬ。徳本行者が『あみだくゝと戀する人の胸にほとけの絶へまない』と詠まれたなかにも彌陀愛慕の消息がもれて居る。

宗教は自己人格の向上を宗とする宗教が高尙である。唯だ極樂の快樂を食する動機のため宗教は惡

いとは云はぬまでも人格向上の動機には遠い。彌陀と云ふ絶對的圓滿の人格を心の底から愛樂して其の圓滿なる光輝ある人格を常に離れず之に愛慕し信樂して心々念佛し、其愛樂する人格に同化して自分も如來に似合うやうに成ることを宗として信樂する所に宗教の價值がある。

二祖上人の念佛三昧は不離佛值遇佛と申して常に佛を離れず常に佛に值遇する所に吾人を指導して常に光明中に行爲せしむる大なる力あり。されば如來を愛樂して常に心々佛を念じて離れざることを要とします。

人生は修行に出されたのである

佛教に積極方面と消極方面とありて消極面より見れば、現世界現人生はかく人間になど生れ出されねばよいものを、そもく六道に迷ひ出したのが生死の苦を受けねばならぬ運命におちいつたのである故に、是非此の迷から出でされば、眞の永恒の生命に入ることとはできぬと。

積極の方より云はゞ、法身の大ミオヤより必然的に修行に出されたので、天にも地にも此の五體五

根六識にも本より罪はない。大ミオヤの聖旨にしたがはざるのが罪である。

無論現人の身心は完全ではない。されども報身の光明を被りて靈化せらる可き性能をもつてゐる。

即ち佛の子として光明生活に入らるべき可能性をもつてゐる。

人類は高等生物の故に、宗教の要あり能あり。礦物でも劣等なる石は琢磨の要はない。人類已下の動物は宗教を以て脱却すべき要はない。人類は金剛石の如くに琢磨せざればならぬ性をもつてゐる。是非とも報身の光明を被りて靈化せねばならぬ。それが即ち法身の大ミオヤより産み出されたる佛性の卵を、報身の慈悲と知慧の光明によりて靈化せらるべき性をもつてゐる。折角に人間と云ふ學校に選り入れられて、十二の光明に依つて信心開發の生活に入つて、大ミオヤの子として此の學校を及第せねばならぬ。

現在の生活は日々二三萬の米が生命をささげて我等に食と成つてくれるので、此の人間の肉と血となつて大ミオヤの光明生活に入るべき身に成らん爲めに米は犠牲と成つてゐる。若し日々二三萬の米の生命を己の血肉と爲して居つて、日々に餓鬼の精神生活を爲せば、食はれたる米まで餓鬼道に墮ちてしまふ。我が責任は重い。此重い責任はとても自分の力では擔はれぬ。無限の力ある大ミオヤの光

明を仰ぐ外はない。

進めよ／＼大ミオヤの光明を被りて、働けよ働けよ聖旨のまに／＼。

大慈悲のオトーサマ

大ミオヤは我は虚空遍滿の大身を以て、永しへに可愛き子たる汝を見つゝある故に、汝もまた、最も親しみのあるオトーサマ、ナムアミダ佛と我を呼べよ。本とうに我は汝のオトーサマである故。慮（うらおもひ）なく我をオトーサマと呼べよ。我は汝が久遠劫來（くをんとふらい）オヤの許を離れ、光り輝きつゝある我前を背ろにして六道輪廻の闇のちまたにさまようをいかばかりにか氣づかひに思ひつゝあることよ。子を思ふ親ほど親をおもひなばとは、肉の親子の間ばかりでなくて、誠に／＼汝をおもふミオヤの慈悲なることを念れよ。

すべての人は同胞

如來は一切衆生の御親である。ミオヤを眞實にミオヤと信ずるのが信仰に入る第一歩である。如來を眞實にミオヤと信ずる時自己は佛の子である。眞の佛子と自覺するのである。如來は御親にて自己は佛の子と自覺する時は他のすべての人は悉く同胞である。すべての人が眞に同胞と信認する時はすべてに對しておのづから親切に成らざるを得ぬ。

光 明

如來の光明法界に周徧せば如何なる形相あり亦いかに認め得可きか。曰はく如來の光明は法界に周徧すれども見聞する事は出來ぬ。然れども實在することは否定できぬ。今例を以て明さん。例へば火大は法界に周徧すれども火性は目撃することはできぬ。火は薪炭の類に燃ゆる時は形相を以て見るべ

きも、純粹の火性のみは認むることはできぬ。如來の光明もまた然り。實に無限性なものなれども人の心意に感じて初めてすがたに顯るゝなり。

献 身

『法身 報身 應身の聖き名に歸命し奉つる 三身即一に在ます最と尊とき唯一の如來よ 如來の在さざる處なきが故に、今現に此處に在ますことを信じて 一心に恭禮し奉つる 如來の威力と恩恵とに依て活き働らき在ことを得たる我は 我身と心との總てを捧げて仕へ奉らん 冀はくは一に光榮を現はすべき務を果す聖寵を垂れ給へ』

先づ諸君よ。聖き同胞となりてよりは、形は人々別々なるも同じく如來の恩寵によりて活ける心靈は一體なり。

献身とは、已に如來に歸命したる一念、已にもはや如來に献げたるものにてあるなれども、日々に新にしてまた日々に新ならんが爲に、

先づ朝には、身心共に聖らになりて如來にあらためて今日も聖旨に献げて身も意も仕え奉らんことを祈念し、自己の物と思へば兎角私に自分勝手に身の行想も意も語も共に聖旨に背きて惡徳をふるまふことに成る。すでに献げたる己と思へば、自ら聖旨に仕へまつる決心になりて、聖旨のまに／＼三業を活動することになる。故にまごころに献身のいのりをなすべし。

法身としては天地萬物の實體として、萬物は法身の能力によりて生産せられ、報身としては無限の壽と無限の光即ち大智慧の光明と慈悲とをもて、すべての心靈を活す處の能力なり。應身としては人の身をもつて教を垂れ、または人の信心に感應する力。

法身は虚空の如く、報身は太陽の如く、應身は水に映現する影のごとし。報身は心靈界の太陽なり。譬ば太陽なき時は地球の萬物の生活々動すべき原動力なきと同じく、心靈界の太陽とも名づくべき無量光如來なくば、各個人の心靈は聖靈的生活の原動力ないのである。すでに更生したる心靈は無量光如來の光と壽とによりて聖の生活々動をうるものなれば、唯肉のみの生活なる人とは雲泥の相違である。

三身即一とは、本から三身一體説と三身各體説との二説あるなれども、それは如來の方より云はば

本一體に在ますなれども、人の方よりは三身に見ゆるのである。

今は三身本體として唯一の如來なりとす。

いづこに在ますとならば、法身は宇宙精神として萬物の本體なれば、法身在ますが故に萬物に秩序が整ひ理法が備はれり。太陽の光も地球の萬物を生化するも悉く秩序の統一せるものは、法身の理法にてある。若しそれならば、自分は如何してか我なるものがあらう。我が五官もすべての機能も法身の理法によりて成立するのではないか、我心がよく知るも、眼の見、耳の聴くも、みな法身の顯現ではないか。

報身は宇宙に遍なく智慧と慈悲と遍在し、其功用が宇宙に遍在せるが故に信仰の水澄む處には應身顯現す。

觀經には如來は是法界身、入一切衆生心想中^一と。

如來は宇宙の本體を身としてあれば、一切衆生の心中にも充滿し、内に非ず外に非ず一切に周遍せる理身にしてあれば、導師は、彌陀身心遍法界、映現衆生心想中^一と。

經に無相法身、虛空同體なれば、其住處なし。但し衆生の中に住し給ふと。

元來宇宙は本是如來の身心であるなれども、衆生自ら自己の生理機能をもてかやうに認むるものである。肉眼を以てかやうに見ゆるなれども若し佛眼をもて見る時は宇宙處として如來の清淨法身ならざるはないのである。吾人の肉眼はその清淨界の中に於て自から現界を感覺しつゝあるに拘はらず、吾人が見る世界もやはり法身の顯現なれば、萬物の中に法身の存在せぬ處なく、また如來の光明智慧の充たざる處なき故に、現にここに在ますと信じて恭敬をさゝぐ可きである。

如來の威力と恩寵により生活するにまた二つあり。自然にうけ得たる身と心との生活は、如來の法身の力と恩とにて、天地と共に生活々動するので、信仰の中に心靈が靈的活動するは報身の力と恩とによる。

吾人が宗教的信仰のなかに聖靈の生命として聖き生と善きはたらきをなすは、みな報身如來の力にてあり。

法身よりうけたる自然の身心があらうとも、報應の二身より教をうけまた新らしき聖き心として生活する。心靈界の太陽ともいふべき報身の力によらざれば、ただ肉の生活のみにては、永遠の生命となることはできぬ。

如來が無限の光と無限の壽とを以て吾人を永遠の光と壽とに生かしむるは報身の力と恩である。

この眞理がよくわかり、全く靈の生命に入りしのは、如來の中に在る身として身も心も本より如來の物にしてあれば、身心共に捧げて事へ奉る。

吾人は天地の實體たる宇宙に吾人を生活せしむべき力なくんば、いかにして活きうべきぞ。

冀くば一に光榮を現はすとは、靈の生活に入りし上は、身に行ふ行爲と口の言語と思想とに於て、すべての邪と惡しきはみな己が私より出づるので、如來の聖旨によりての行爲は正しきと善とにて、正義としては己を守り慈悲をもてすべての人に同情をして光榮を顯はす。

なれどもみな如來の聖寵によらざれば能はず。私の心を献げたる時如來の聖旨が我の心となり來りて、あなたに仕へまつる思をもて、今日の務を果すことに、あなたの力をあたへ給へといのるなり。

苦惱と罪惡より脱却

人生何れに向て行路を定めんか。何が眞實の幸福なるか是自己の運命を定むる分れである。

我らは佛陀が安住し給ふ處に安住せざれば眞實の安穩は得られぬ。其安穩處に到らんには二の關門を貫徹せねばならぬ。一には人生の苦惱、二に自己の罪惡の苦悶である。天然の人は自然に脱却せねばならぬ動物性から人間に進みし或る垢質をもつておる。生の恐れ死の怖れ、何となく種々の煩悶が胸中に交々起る。一には人は幸福追求の自然の欲望に世は之が満足を與へぬ即ち求不得苦、すべての苦は逆ものがれ得べき理なく是實は自己の顛倒。

次に全體斯の如きの苦の原因は即ち罪惡の源自己胸中に横はる煩悩が原因である。病患の苦痛は即ち病である。病治せば苦痛は闇を除く如く、苦の本たる煩悩を除くのである。人生は自から怖るべき爆裂彈を抱いてをる間は安心得がたし、自己胸中より勃興する煩悩即ち肉の我から發動する罪惡の原動力が自己に伏在す謂ゆる貪瞋痴の煩悩、己が情に契はざれば忽に憤怒し、我情に契へば貪愛を起し、疾忌忿恨等の種々の弱點が悉く聚合して自己の胸中に伏在す。機會に應じて競ひ起る。然るに亦外界には煩惱を誘導する機會が世に充滿し、酒肆娼樓等の誘惑、また憤怒を起させる等の種々の機會は世に在りて、自己の胸中の惡魔と外界の誘惑とは之を脱却せんと欲するも自己の力の及ばざる處、

止めんやめんとすれば益起り、犯すまじく／＼とすれば彌々盛なるは、即ち肉に伏在する煩惱魔である。之を脱却せんにも力の及ばざる處。さればとて終身之が奴隸と成り永遠に闇黒に墮落することは奥底の我の許すこと能はざるところ。

自己の力の弱さ、世間の頼にならぬことを自覺して之が非常の苦悶となりて初めて眞實の信仰心が起る。實は此煩悶こそは如來の恩寵である。此煩悶が眞實に自己の無力を認めて絶對なる如來に歸命信賴する動機である。

こゝに於いて自己の惡罪の煩悶甚深なる懊惱あり血と涙とを以て佛前に罪業懺悔の因となり、甚深悲痛なる懺悔の筈には自己の生命を犠牲しても如來の光明獲得を仰ぐに至る。自己を犠牲して分に罪惡の我より脱し、如來の慈悲に罪業の凝固も融解して、靈（きよ）き我に復活して、暖なる恩寵の懷に育てられ、畢竟常樂の安穩なる状態に至る迄の信仰に三階あり。一に歸命。二に融合。三に安住。

歸命——感情の信仰

我が苦惱の本は全く自己の罪惡である。此罪惡と云ふものも自己胸中の煩惱は生れながら我に具りて、逆も我力にて除くことは不可能である。此解脱は容易でない。實に煩惱深うして底なく、業障深重なるを反照すれば、懺悔の信念彌々激昂し來る。佛陀の親化に預りて罪障甚深の懺悔より佛陀の教に隨ひ現に彌陀の光明によりて靈に復活されし韋提希（ゐだいき）夫人の懺悔と、佛陀に哀を求めて歸命信賴せし觀經の因縁に此心狀を能く現はせり。

夫人は曾つては摩伽陀（まかだ）一國の國母、沙羅大王の正后として身を珠簾深き宮中に榮花の春閑（のどか）に榮耀の秋涼しき九重の憂世の辛き風はまだ曾て觸れしことなく、八苦の娑婆とはよそごとに聞き給ひしならん。其故は國王は徳厚くして國家平穩に、加之、佛法を以て民心が修まれば錦上更に花を添へし太平の海靜かに正法の風徐ろに來る。上下共に良風の香薫を四方に流したれば、其國主たる夫人なればおもへらく人界ほど幸福なるはあらじ生々人身を受け世々三寶に値はんと、常々佛陀

に随つて、五戒を受け八齋戒を奉持せるも、然し人界は全く不夜の世にあらず。人生に闇黒面なきを得んや。昨日の好天氣今日の大暴風と變ず。人界を襲ふ氣壓は九重の奥深き夫人の身上に壓し來れり。そは他ならず。會つては賢明の太子孝順なる嗣子と稱へられたる太子の阿闍世（あじやせ）も、邪見逆惡の提婆調達（だいばちやうだつ）の奸智と執拗なる誘惑には質朴なる太子端なくも動かされ、世にもあるまじき恐ろしき逆意こそ發したれ。父王を執へて七重の室内に幽閉し堅く門戸を閉し、守門を以て警守せしめ膳食を絶つて父王を殺害せんとす。夫人は如何にも之を救ふに道なく密に身に麁蜜を塗り瓔珞の中に葡桃漿を盛つて大王にたてまつりしも、夫人の密贈はやがて太子の知る處と爲り、太子は大に激怒して既に利劍を執つて一刀の下に母の夫人を害せんとしたまふ。幸にも二の侍臣の忠實なる諫言に依りて辛くも白刃の下は免れたれ、更に父大王に食物を贈ることを防禦せんがために内官に勅して夫人をば深宮に幽閉せられて再び大王の許に往くことは遏絶せられた。夫人が已に幽閉せられた後の心情はいかに憂愁憔悴して自ら安んずる能はず、仰いで天に的なく俯して地に依り處なく天闇く地黒く何に向つてか此慘禍を免れん。誰に向つてかこの悲惨をのべん。只靈山に在ます恩師釋迦如來に依つて慰安を求むる外に我此悲嘆は解くる道なし。思はずも靈山の方に向つて悲泣雨淚し

て、願くば世尊よ我が爲に阿難目蓮尊者をして我に慰安を與へ給へと禮念し上れば靈山に在ます世尊は韋提の心の所念を知りたまひて、目蓮阿難の兩弟子に勅して二人を侍して靈山に没し給へば忽ちに王宮に現じ給ふ。時に韋提希は禮し已つて、世尊釋迦如來の身は眞金色にして百寶蓮花に坐し兩弟子は左右に侍し梵釋等の諸天は空中に在つて普ねく天花を雨してもつて供養する聖相をおがみ奉りて何とも恐懼措く能はず、自ら瓔珞を絶ちて、身を地に投じて號泣して佛に向つて白して言さく、世尊よ我昔何の罪ありてか我がこの惡き子を生める。世尊よ、また何らの因縁ありてか提婆達多を眷屬と爲し給ひしぞ。唯願くは世尊よ我が爲に畢竟安心の處を教へ給へと。

斯の一節が即ち從來依屬し來たる世とまた自己との實に頼みにならぬことを感じ、自己の悲惡を自覺して畢竟の依屬すべき物を世尊に教給へと、すべてを獻げて佛陀に請願せし處に歸命の感情全幅を投じたるなり。夫人が曾ては人界ほどもでたきはなし此人心ほど幸なるはなしと思ひ込みたる感情は此境遇の爲に俄然として崩壊せられた。現實の身は罪障深重にして現實の世は絶對的に依屬すべき處に非ずと自覺せられた。恐るべき己が罪障厭ふべきは娑婆憂惱恐怖の充滿せる世と認めてホト／＼厭忌の情が禁じ難かつた。夫人は自己の苦惱と罪惡の深甚なるを認めて厭忌して救を仰げども未だ何

なる偉大なる靈格に歸命信賴せば此苦悶の中から救はれて永遠の安穩得られやうかは自ら知ること能はぬ。故に至誠に教を仰がれた。此が即ち深甚の悲痛の懺悔と歸命の感情である。

韋提希は此濁惡の娑婆は苦惱と憂怖と充滿して不善のみ聚多し。願くはかゝる恐しき惡人を見ず惡聲を聞かぬ清き處を示し給へと。自己のすべてを獻げて全身全幅をささげし歸命信賴の心狀を、導師が韋提希に寄せて述べられた。

夫人眞心徹到して苦の娑婆を厭ひ、樂の無爲を欣ふて永く常樂に歸することを明す。但し無爲の境には輕爾としむ階むべからず、苦惱の娑婆は軌然として離るゝに由なし。金剛の志を發すに非るよりは永く生死の元を絶んや。若し親しく慈愛に従はずんば何ぞ能く斯長歎を免れんと。

此文に能く歸命の情を寫し出せり。若し情の信仰を三位にして見れば、初、歸命とは自分を顧みれば罪惡深重の凡夫闇黒に墮するの外に道なし。歸命信賴せんとする如來は遠く大にして其懸隔は甚し。かゝる罪惡深き吾を如來は容れ給ふ哉。如來は甚深幽玄にして、唯一切諸佛も悉く彌陀を稱揚讃歎する。遠く名稱のみを聞いて高きみ空遙かにあこがるゝも、業障の雲深くして神聖無上の威權者に對して近づき難し。されど釋尊の勸めに依れば久遠劫のミオヤと聞けば内心自づと親に對する親密な

感情に如來を戀慕の情は起る。其若しも大悲攝取の御手に攝められて永劫の沈没を免るゝを思ふ時はたとひ身命を捨てても如來にすがらざるを得ぬ。我ら無始已來孤獨につめたき凡夫、如來大慈悲の懷に暖めらるゝに非れば靈の生命は復活し難し。靈の命の活きるにあらざれば父子永劫に遇ふこと難し。彌々彌陀を戀しく彌々如來を慕しくなる。されども業障の間は除き難く煩惱の雲常に胸に横はり、未だ如來に接せざる間は最熱心なる感情となる。

例へば男女の間に於ける戀愛者に對して、未だ逢阪の關のゆるされぬ程は感情的に熱烈にして、詩經に窈窕たる淑女は寤寐に之を思ふ、之をおもふて得ざれば展轉反覆すと云ふ如くに、此婚儀が成立するか否かを疑うて、非常な戀愛の爲に胸に燃え焦るゝ悶へがある。今此罪惡の凡夫なれども我全く如來の有(もの)となり如來我有となるに非ざれば眞實に安心得べくもあらず。こゝに於て煩悶となる。世には失戀の結果自殺を遂ぐる如く、眞面目に信仰此に至れば肉の身命は物の數とも思はで、只如來の中に我を投じ全身全幅を投じて我は如來の有なりとの靈的結婚の目的を達せん爲には、如何なる事も人生只一大事のみと云ふ金剛に堅く結晶したる感情は、いかなる物を以ても換ゆることはできぬ。遙かの雲上遙かに懷れる感情の熱烈な信仰を歸命すると云ふ。

益々進むに随つて、彌々因縁相熟して陽春の和氣に催ふされて爛漫と麗はしきを呈し香を流して、華燭の禮を擧るは信仰の中心。人の信仰と如來の恩寵との親密なる關係を融合とす。

融 合

宗教の中心眞髓は感情の信仰殊に自己の中心と如來の大我との融合する處にあり。精神が此に安住するを以て初めて眞の安寧を得。

大我の中心と小我の中心と大小融合して親密の極に到る状態なり。此に到達する順序として、初めに遙に如來を高きみ空にあこがれ一心に念佛し戀念して止まず。聖法然の我はたゞ佛にいつかあふひ草心のつまにかけぬ日ぞなきと詠み給ひし如き、大宗敎家の客體に對する戀愛の情の豊富なるは自然である。釋尊が自ら肉に愛すべき耶揄陀羅（やすたら）等を顧みず只靈界の美人舍那（しゃな）圓滿の靈き聖容の見ま欲しさに慥れしことはあらはに經に示されねど、法華經に我滅後に於て一心に佛を見んと欲し自ら身命を惜まざれば、其心の戀慕するに由つて我出でゝ爲に說法すと。是佛陀が自己の會

て靈界の遮那（しゃな）如來を見んと欲する情で未來の衆生が佛に對する情を汲み給ひて宜ひしにあらすや。

如來と人との感情に於て融合の狀態は譬へば春日和風に櫻花爛漫と麗色を呈し馥氣を流す時雄藥より放射する花粉は雌藥の子房に注入す。其當時彼等は無情ながら造化の妙用を爲す如く、先に感情の信仰として遙に雲上の靈月にあこがれ常に一心に憶念して止まぬ阿彌陀如來眞金色圓光徹照して端正無比なるを戀念し、念々不捨の稱名は我らが罪惡も彼の慈愛の暖かなる靈氣に溶解せられて、我らが愛念の情は大なる如來の慈悲の懷に容るゝところとなりて何時かは隔ての雲排（ひら）けて如來の慈顏に接し、すべて我は融（と）けて如來の大我に合す。こゝぞ悉達太子（しつたたいし）が最愛の妻を顧みず三昧の床に入りて遮那圓滿の月の容（かほ）に接し、彼の大我の如來と三密融合し、我は汝の有、汝は我有と宇宙最奥の大自然者と入我の境に入つて、自受法樂を受けたる心情を如來十佛の自境界と爲す。

小乗佛敎の釋尊は人格としては立派なれども宗教的理想の内容を表明してをらぬ。宇宙大靈の靈的人格現なる盧遮那（るしゃな）圓滿の相好を客體化して、それとの入我々入の神秘的の心理を語つてを

らぬ。

大乘圓滿の經華嚴（けごん）は釋尊正覺（しやうかく）を成じ七日の間華嚴三昧に入つて遮那圓滿の如來は方に蓮華臺に坐して普く法身大菩薩の爲に他受法樂を與へ給ふを釋尊は見給ふ。其華嚴三昧の釋尊の心靈界に現はれたる遮那如來である。釋尊の神秘的關係を示されてをる。

韋提希夫人（ゐだいけふにん）が金剛の志を發して、歸命信賴の心を照し見て、釋尊は初日想觀より順を経て彌陀如來に接せしめられた。

釋尊が夫人に諦に聽けく、善く思念せよ。汝が爲に苦惱を除き永遠に大安穩の處を示さんと語り給ふ時に、無量壽佛空中に住立し給ふ。觀音勢至二大士左右に侍立し、光明熾盛にして具さに見るべからず、百千の金色も比とすることを得ず。此時佛陀の慈悲の心は韋提希の心を融し、韋提希の心は彌陀の中に融け込んで、心に大歡喜を生じて、未曾有と歎じて廓然大悟して無生忍（むしようにん）を得たりと。

韋提希夫人身は幽閉せられかくの如き禍厄の中に在りながら、神（ごころ）は歡喜無生を得れば、もはや昨日の如きの憂悲苦惱は解脫したるや必せり。是念佛三昧の妙果なり。

喩に、植物が爛漫と花開く時に雌雄の交感を爲して新しき子の生命が発生する如く、神人交感の神秘關係を以て靈的信念は生れて眞の佛子と成る。楞嚴經（りやうこんきやう）には此交感の心理狀態を表せり。神人融合靈感不思議を感じる靈胎が娠み新しき生命と生れ來る我は如來の有（もの）にして如來は我有との實感はこゝに於て成立す。

安 住

情の信仰己と如來融合が心の花とすれば安住は結果である。融合の靈感微妙の快樂は麗しい花が馥香を放つて、我は如來の有との自信は建立された。我は如來を離るるなき靈で、靈の生命は如來の大我中に安立しての生活である。己にこゝに至れば身は人界に在れども神（こゝろ）は如來光明中に住す。如來在ます處即ち極樂涅槃界である。眞實微妙の花匂ふ處光榮と靈福の光輝く心の都である。正しく如來大我の中に住する心は世の八風の爲に動かされず、永へに安穩である。こゝを諸佛の所住處とす。たとひ諸佛の如くに了々と四德の莊嚴が顯現せざるとも、理想は如來の大涅槃界に安住す。

如來無量功德の莊嚴する處即ち佛智不思議の境界である。必しも十萬億土の西方のみを求めずも、

阿彌陀佛去此不遠（こしふをん）である。

吾人は人間的業識（ごつしき）を以て自分で此處を娑婆と認めて居る。若し肉眼を用ひずして佛眼を以て觀れば阿彌陀佛現に此に在ます。大經の下に釋尊が阿難らに見せしめて其時一切萬物は悉く隱覆して唯阿彌陀如來大光明が十方を照し淨土の莊嚴輝けるを見る。佛眼を以て見れば十方界悉く清淨佛土である。

心眼未だ開けざる者は只佛智の境を仰いで信すべし今現に我如來無所障礙の光明中大慈悲の懷に在る我なることを。

世尊は常に不動の如來中に精神が安住し給ふが故に形の上にかなる事情が有らうとも内心毫も動じ給はず。世雄佛陀は我ら衆生を自己の如くに大常樂の光明の中に安住せしめんと欲し給ふ。

精神的に彌陀の光明中に住處を得ざれば畢竟して眞に安穩は得ること能はず。願くば諸の衆生と共に釋尊の精神の常に安住し給ひし處に我らも安住せん。

情 操

宇宙間に絶對的に歸命信賴して永遠に大安穩を得、釋尊と同じく彌陀に入りて眞の安立を得たる後は、我心靈は彌陀のものにて彌陀を離れて我なきなり。然る時は彌陀は我有なり。盡未來際永遠に離別なき靈的結婚である。假令無上正覺を得るとも無量壽に合一したのである。今現に此靈的生命は彌陀の有として常に無上恩寵に愛せられ無比の慰安を與へられる。ここに到つて自心を建立するものは彌陀に對する貞操である。例へば貞婦の夫に對する如きの情操である。

我等假令彌陀恩寵の信仰は得たりとも、此肉の煩惱の有るかぎりは胸中の惡魔ややもすれば本の煩惱の狀態に逆戻りせんとす。假令根本的に本の主我放縱生活に爲らぬ迄も聖意に背きて自ら慚恥なきに至る。情操を破壊する機會數多あり。最も強敵は己を捕虜にせんとする胸中の煩惱我である。また宗教的にも種々の異教異學異見の輩ありて、神聖なる彌陀の建立したる情操を破壊せんとす。依て常に念佛して金剛の信を建て益々彌陀に對する情操を鞏固にせん。

聖善導は我等が信心の情操の建立をのべ給ふて、仰ぎ願くは一切行者等一心に唯佛語を信じて身命を顧みず決定して依行せよ。佛の捨てしめ給ふものをば即ち捨て、佛の行ぜしめ給ふものをば即ち行じ、佛の去らしめ給ふところをば即ち去れ。是を佛教に隨順し佛意に隨順すと名づく是を佛願に隨順すと名づけ是を眞の佛弟子と名づく。

彌陀に立てたる信心の情操はいかなる事情の下にも動ぜざれ。若人ありて多く經論を引て證して生ぜずと導くといへども決定して破せられざれ。假令化佛報佛若は一若は多乃至十方に徧滿して各々光を放ちて舌を吐いて徧ねく十方に覆ふて、釋迦の教に隨て一切の凡夫が専心念佛して往生を得と云ふは此は虚妄なり定めて此事なしと云はうとも、此らの諸佛の説を聞くと雖畢竟して一念も疑退の心を生ぜざれ只益々この信金剛の情操を建て爲に動亂せられざれと。

本有法身の大慈父は眞實に我等衆生を愛し給ふ。此聖意を表はして、此世界の衆生の爲に法藏菩薩の身を以て、我等を愛する恩寵として大願を發し、一々の誓願は衆生の爲である。十八願に至心に我を信ぜよ。我を愛せよ。我國を望めよ、との聖旨を我等に傳へんが爲に、此世に出でましなされ、無量の苦難を受なされしも偏へに我を愛し給ふ聖意ならずや。

實を以て大慈父の聖意を親ふに、十方三世一切の諸佛と云ふは實は唯一の慈父より分身して、親に背きて六道に流浪するを憐れみて、十方の有ゆる世界に身を分ちて出世なされて我等が爲に慈父の子を愛する聖意を傳へんが爲である。殊に法藏の因十劫正覺の阿彌陀如來と現はれて一切諸佛に殊に超勝して深き聖意を我等に懸けなされ、我汝を愛する故に汝も亦我を愛せよと、我等を愛の光にて抱擁して、我等は彌陀の慈悲に抱擁せられて、我が無始已來頑固に固りたる心情は如來の慈悲に暖められされば融合できぬものである。さればこそ彌陀と現はれ一切諸佛に咨嗟せられ、諸佛に勝れたる身を示されしは、我等に二心なく不動の貞操を建立せしめんが爲である。實は彌陀と現はれ諸佛と示さる大本は一の本覺法身の彌陀なれども、我等衆生を攝取して本覺の都に還らしむる方便としては、彌陀に我等を抱擁せしめ、諸佛は其媒介者として示現なされた。人情の自然として自己の配偶者を選択する。而てより已上の者に心情の遷り易きは凡夫の性情である。依つて我等が心情に應ぜんとして彌陀は十方一切の國土より有ゆる善を選び美を選びて、眞善微妙の處に在まし、諸佛超勝の尊體と現はれて、我に無上の愛を以て迎はせ給ふ。我等が至心に信じ愛して歸命する時は大慈悲に融合せられて我等は無始の妄我は融けて靈き我とし給ふ。

信仰の三要領

宗教は、先づ安心を定むるのが第一であります。安心とは、信仰の決定であり、安心を定むるに三つの條件があります。

第一に、絶對的に信頼する神を信認すること。

第二に、信仰の目的、即ち此の世及び未來永遠に安心出來得る處。

第三に、いかなる行業にて其の目的を達すべきか。

初めの信頼する神とは、宇宙には、絶對的に尊い二つとない、唯一の偉大なる力を以て一切の衆生を攝取して救ひ給ふ尊きかたを、如何なる聖名を以て稱し奉つるのであらうとなれば、釋迦如來は私共に教へて唯一の尊とき神を阿彌陀如來と云ふ名を以て其の尊とき御方を教へて下された。

經に無量壽如來の威神光明最尊第一にして、諸佛の光明及ぶこと能はざる處なりと、是である。

絶對的に尊き如來は一體にましませども實に無量の功德備はり給ふが故に、無量光等の十二の名を

以て御徳を表はし給ふ。

此の尊き如來は全く私共の眞の大御親にまします故に、永しへに慈悲と智慧の御心の光を以て私どもを照護し給ふのである。晝夜の隔てなく其の大光明の中に護られつゝあると云ふことを信じて疑ひなく、眞實に心の本尊様と成つて居る様になれば、先づ第一の信賴する神が定まつたのである。

次に信仰の目的とは、

今現在のかたちの上の身も此世界の事も永遠の頼みと成るものではない。肉眼で視ゆる世界は何處までも當てに成るものでない。依つて大おやさまの御聖旨の在ます方を極樂淨土といふ。其の極樂淨土は絶對的に生死のない處である。其の常住不滅の淨土を以て歸着する處と定むるのである。さればとて死して後ちと云ふことはない。眞に大ミオヤの如來が能く信じらるれば、眼を閉ぢて深く能く感じて見れば此處が矢張り如來の大光明の中であり、大光明の中に正しく安住する精神と成れば、たとへ身體は假りの身であらうとも、精神は極樂の光明界に栖みあそぶ想となり、眞に信仰出來れば、肉眼では娑婆に居るものゝ、心には淨土に安住する理想となる。而して彌よ／＼命終りぬれば、今迄理想に見て居つた淨土が今度は現實になつて來ると信するのである。若し此の信仰が出來れば、身體は

死しても心靈は永遠に不滅と成るのである。

第三に其の目的、即ち精神極樂に安住するように如何にしたならば出来ると云ふに、第一の信ずる如來様を寢ても覺めても、心に懸けて信念を運ぶ時は、ついにいつでも如來の光明の中に在る想と成る。常に念佛を稱ふる旨趣も、常に如來を心に念じて、心にはなれぬようにする爲である。

或は如來の十二光佛の禮拜をなし、または如來の御功德を讃嘆する、即ち讃歌をうたふのも、矢張り大ミオヤの如來を心にわすれぬようにする爲である。然して全く信心開發する時に身は此處に在りても、心は淨土即大ミオヤの大光明中に栖みあそぶの想と成る。

右の三つがたしかに定まりて、疑がはざるに至つたのが安心決定した信仰と申すなり。

人 中 の 白 蓮 華

教祖釋尊の教によれば、阿彌陀如來の威神光明は最尊第一にして諸佛の光明の能く及ばざる所なり。また曰く光明普く十方世界を照して念佛の衆生を攝取して捨て給はず。今日く、如來は靈界の太

陽なり、例へば太陽の光熱化の三能を以て一切生物を化育する如くに、如來は智慧と慈悲と威神との光を以て衆生の心靈を靈化し給ふ。經に曰く若し衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ずと。衆生佛性の卵は如來の慈光に孵化せられ、生死の凡夫は轉じて永生の佛子と爲り、闇黒の我は光明の我と生れ更る。されば念佛する人は人中の白蓮華なり。觀音勢至も勝友と爲り當に佛と成るべき佛の子なりと。

實に彌陀は心靈界の太陽なり。如來の智慧と慈悲と威神との光明は念佛衆生の心を靈化し給ふ。若し衆生が如來の聖意に合はんと欲せば、至心に如來を信じ、如來を愛し、靈國に生ぜんと欲すべし。

然る時は衆生佛性の卵は如來の慈光に孵化せられ、生死の凡夫は永生の佛子と更り、闇黒より光明の生活と變る。

炎 王 光

彌陀の光明普く十方に超絶し一切を攝して洩すことなきも衆生何によつて之に接すること能はず感合し靈化すること能はずとならば、そは衆生の無明及び罪惡の垢障あればなり。炎王光によりて衆生の垢障覆深（ぶじん）を消除して、普遍的の光明を衆生の心理に蒙らしむるが爲に、其衆生の障礙物を除く、此炎王光の力なり。

彌陀に對する阻害物甚だ多しといへども、いま三障を以て明さん。

業障。罪障。煩惱障となり。

業障とは無始より已來、身口意の三業によつて造作する處の業、不善惡業甚だ多し。この業因が神識に薰習し、習慣性となり異熟性となりて、或は不善を好むあり。闇昧なるあり、惡弊なるあり。賢明なる善良なるあり。過去といふとも前身のみをいふに非ず。中年の者には青年の日は過去なり。然れば幼年よりの所作業因が、習慣性を成して、己の性格を成す時は、改めがたくして不善の性格は業

障となる。

生れつきとしての性格あり。後天に習慣性をなしたるあり。

煩惱衝動より出で惡習慣性格をなすを業障と云ふ。病的の惡なり。一定の快樂はしばしば習慣となり、習慣より必需となり、受感性麻痺するが故に、満足を得んが爲に刺激を増加し終には性格となり惡弊症に至る。惡弊症は身體及び精神を刺激するが故に精神に病的變質生ず。第一代には惡習性なるも二代には惡遺傳即ち業障となり來る。遺傳性となる心的變質は初めて孫に現はるゝあり。

通常の主我煩惱に出でし惡衝動も、病的變質となりては、他の苦惱を喜び、甚しく嫉妬し、他の財を毀損し他の困却を見て満足とする殘忍の淫好と惡意害意相合すれば人の性格は自己の禍福を忘れて他人の苦惱を喜び他人の喜に不快を感じる如きは亦病的にして業障とす。

煩惱障業障罪障

世界には惡の誘惑充滿し、所謂六塵の如く五欲の境界等の如くなり。然れども自己に煩惱の衝動な

ければ其らは動機となるに非ず。惡欲望惡衝動即ち煩惱ありて五欲の境の關係より惡をなすにいたる。煩惱とは人の天然性格に出づる衝動にして無始已來の任運に具有せる垢なり。世間に云はゞ、動物原始の祖先より出たる普遍の幸福本能の顯現なり。この幸福主我は一切惡衝動の根本なり。此に肉慾と我慾とあり。肉慾とは榮養生殖等の慾にして身を保存するにつきての天然なり。我慾とは主我的の慾にして己の利を食り他の利害を顧みざる自己主我なり。これを五鈍使の惑と云ふ。この煩惱は任運に具してこの煩惱より覆ふ所となりて靈光に適せざるものなり。

業障。普通根本惡の煩惱を恣にし尙一層の惡習慣より性格を作るものなり、病的の惡弊症と名づく。煩惱が欲する一の快樂をしばくすれば習慣となり、習慣より必需となり、たとへば一の快樂をしばくすれば受感性麻痺するが故に同量の渴乏を治せん爲に刺激を増して必需と非常に強き刺激と相合し意志を刺激し要求の奴隸となるにいたり終には精神病的變質となり第一代には惡習慣が二代三代には遺傳となるにいたる。遺傳若しくは自己の習慣惡弊症みな業障に屬す。業は因にして是に對する果報即ち苦毒あり。之また準じて知るべし。

罪障。根本煩惱の衝動ありまた遺傳的習慣業障に加へて、身口意の三業を以て十惡等の罪をつく

り、また罪業を以て悪性格を新たに増加する如きは悉く罪障とす。

三障の悪の原因によるが故に苦毒の果報ありて次第循環して常に苦を受け、此苦毒及び罪過煩惱ありて如來の靈光と遇合すること能はず。これを脫除せんには自己の力の及ばざる所、炎王光によりて之を除く。炎王光は大火炎の萬物を焼き盡す如くに三障を消滅せしむるの光用あり。

自己の根底

庭にいとこまかなる葉草生へるを見て、彼草は甚だ小けれども彼が根は何に本づきて、いのちを保存せるやらんとおもふに、之は全世界を列なるところの地球に依りて生活せり。我肉もこの地球に養はるゝも、人は肉のみならず、精神を賦與せられたる生類なり。我等が精神は何か是根底なる。是無邊の宇宙現界を容れて之が本體たる處の絶対の理性大精神、是我等が根底なり。譬へば絶対精神は大洋の如し。我等が心は浪の如し。波は大海の水を離れざる如く、本體を離れて我あることなし。若し本體を離れて我精神あらば大地を離れたる草の如し。榮ゆべき理あらんや。我ら精神無限の本體より

現はれて自らいまだ自己の根底をさること能はず。いたづらに唯主我を執して無限の本體に歸ることを知らざれば、くらきより出でくらきに入る。豈にかなしきの極にあらざらんや。いかゞせば無限の光に入らん。なにによりて無極のいのちを得ん。自己が自己に對する目的、是なんこの無限にかなふべき徑路をもとめてねてもさめても求むる處是のみ。しかるに最勝最易のみちを得たり。

まごころをさゝげて、絶待なるかぎりなきひかりにて終りなきいのちに攝してすてたまはざるまことのひとりの父の聖名をあがめてすくひをいのり、

かぎりなきひかりかぎりなきいのちの至尊に、われをすくひたまへと仰で自らの心を彼に投じてのこりなからしめよ。こころにすてされ。無限の光にてらされて、無限の光といのちとはなりぬべし。

自己の根底なる無限のひかりをあふぎ、専ら念佛し、かのみひかりにこころを凝らし、彼の實現をいのり、また感謝してやまされ。

自己の根底は遍空間。腦や胸臆に之をとゞむなかれ。

仰いで盡十方無碍光如來を念じ奉れよ。光明の實現せんことをいのり奉れ。

眞實の自己

自己の眞面目、天真玲瓏な心の状態を至誠又眞實心と云ふ。此眞我なるものは、宇宙の根底から個人の眞髓と爲りて面を此地上に顯現したものである。眞心は、種々の肉我の虚妄幻影の爲に覆はれて居るものの、眞心は玲瓏として居る。

人には全く我々には眞の我でないものを我と認めて居る迷が有る。此れ即ち虚偽である。我々が唯肉我有るを知て、眞我を認めざる間は實に迷妄である。天然の人は唯肉の組織の中に我とおもふて、絶對根底から突出して居る眞我を自覺せず。

人間は眞實の我有て始めて人生の價值が有る。宇宙萬有の中に獨歩して存在するのは絶對と連絡して居る眞我あるからである。若し眞心が毀れて仕舞ふ事が有つたならば宇宙全體が無と成る。此自我ありて大なる如來と調和する事も出来る、否調和するのではない、宇宙全體を此一個の個體に溶入して居る、實は融け入て居る。

如來の絶對無限の光明、萬德圓かに備へて宇宙に徧在して在りながら、其まゝ此個性の中に溶け込んで居る、否吾人の心中に相入して在ますのである。

眞實一個の眞性が宇宙に徧照して遺す事なく在る眞我は否定する事は不可能である。

此自己に絶對なる如來と調和し合一する方と又相應せざる方との二面が在る。眞實眞我如來心光と相應する方を眞實心と名づけ、相應せぬ方を虚假心と云ふ。

眞實の價値、

自己は眞心としては絶對大靈より分出したるに相違ない。本の本覺の懷の中に無爲に眠つて居るよりは、個人として世に出で一の使命を以て世に出たのは、矢張りあたりくじの幸福である。然るに眞我が虚假の皮殻を自ら賦したるは迷惑の如く感ずるけれども實は道に契ふ。黄金にも鑛垢が着いて居る。又植物の實にも皮殻が着いて居る。然して生の力を發揮せんには虚假と云ふ鑛垢を去て眞金の眞價を顯はすは實に苦闘的努力であるけれども、其苦修に依て貴き眞價は出るのである。

人の心に虚偽と云ふ皮殻は、果が熟したる上には必ず除き捨てらるゝものである。

天然の人は鑛垢心を以て眞我とおもうて居るから、無我に爲れと云ふた時に非常に失望する。佛教

に解説と無我の眞理を教へたのは、鑛垢を去れと云ふのである。其積極的方面には眞心を高貴な寶と爲るのである。

鑛垢の儘の我身即ち無明の儘あらがねは金を鍊出してこそ貴きものである。無明より解説してこそ眞金の我は顯れるのである。

生の眞價は無明我より、眞我を鍊り出し、眞我の力を充分に發揮する處に眞價がある。

眞我は絶對根底より頭を地上に顯したる個體なれば、自己には無限の根底ある故に、飽くまでも自己の力を發揮しなければならぬ。

この眞心には必ず靈的圓滿なる人格と爲り得べき性と力とをもつて居る。眞心は無限の光と壽との絶對圓滿なる佛と成る事の出来る性である。眞心には必ず結果がある。例へば杉の種子は、果皮に包まれて居る。實に細小なもので、其元素と云はゞ、炭素や蛋白質などの幾種の原素の結合物であるが其が土地に播いて芽は二葉の芽から幹や枝葉も段々に發展して、頓ては蒼天を凌ぐ様な大杉となる。私共の佛性の眞心も自己に在らん限り發展して、智慧や徳が圓滿に完成した曉には、無限の光と、無限の壽の中に萬德圓滿なる佛と爲る事が得らるゝ。

果の中に核が若し生命が無かつたならば種子が萌出る事はない。吾人の眞心佛性はやがては佛と成る所の核である。この核が生命である。此の靈の種子には自己を完成せんと欲する自由がある。自己から自發的の生成力の外に、外界から注入するものではない。種子は皮殻すべてを犠牲にして自由の束縛を破棄する。

人は自己にもつて居る生命の有らん限りを盡して、初めて自己を完成するものである。此の種子を自由に成長せしめんには、太陽の力を仰がざるべからず。吾人の佛心も、如來の智慧と慈悲の光明を仰がなくてはならぬ。光明に靈化せられて、自心の信心を完成し、蒼天を凌ぐ大木の如くに、吾々の佛性が光明に同化せられたる境には、自己の心が如來化し終れば、光明中の生活々動が出來て來る。

無明

心靈の光明未だ覺明せず、肉の妄動的意思。

人生の行路、一足先は闇の中の道程にて吾人の一生はいかなる逡巡迂路をたどりつゝゆくや自ら前知すること不可能である。

小兒産れて數月搖籃に倚りて眠むりし姿を見よ。天使を生き寫にしたる此眠顏誰か圖らん、此嬰兒こそ將來稀世の強盜と世にしられ囚獄の中に荒獅子の猛威を振つて奮迅する凶漢の雛子たりしとは。實に人生行路何れに向つてか行かん。我行衛人の身上、無明の人生殊に危嶮なるは青年男女の未だ曾て經驗もなき路に意馬心猿の自ら制するに術なく路傍の出來事に全力を賭して一大事の目的を過つこと甚だ尠からず。

ほのかに前途に希望の光認めつゝある身としても肉の妄情に驅られて暫らくは理想の月さえ覆はるゝに至りぬ。まことに誠めても警むべきは自己の心。

人生の闇路をたどる同じ産土（うぶすな）の村里に産れ出たる小兒數十人共に昔は遊び、竹馬に戯れたりし者、やがて老い行きて其人々の貧富貴賤その運命さまざまに受ぬれども、人界に於て六道のうちにはまた幾千の階級にかわかれけん。誰かはこの小兒等が斯くばかりに種々にかはりゆくものと思ひたりけん。

人は天より封じたる符函に自己の運命を記載されて生れ來りしにもせよ、いかに己が終身の歴史を自ら識ることを得む。無明のふかき我らに於ては日々に自ら開き見ず覺らず過ぎ行くものを。

人自ら智ありとおもへども、自ら生の從來する處死の趣向する處を知らず。

往昔、佛陀世尊の在世に一人の老公あり。家富み巨萬の財を有せり。世尊彼が命數已に旦夕に逼りしを覺り給ひ、大慈彼を度せんが爲に佛陀自ら其家に訪ね給ひて彼に勸めて度（すくひ）を求めよと説き玉ふに、かの老公曰く、今日家の工事に暇なし。此の營造落成の日に於て願くは再び來り給へ、と。世尊の大悲も此頑迷を救ふこと能はず。世尊空しく還り給ふに其夕に彼の老公俄然として身まかりぬ。誰か數時間の後を自ら豫知することを得ん。無明のふかき凡夫。

東京に一の士族あり。其性貪戾卑吝種々に惡計奸策いたらざるなく、數十年間にして十數萬の財を

有すに至れり。彼れが吝嗇自ら我が衣食まで惜めり。彼漸く五十にして不義の富初めて得意の地に立ち自から妻を厭憎して離して新たに廿才ばかりの若き婦を娶れり。未だ數月を経ざるに自から腦溢血にて頓死せり。然るに妻はまた百ヶ日を過ぎざるに自己の意に適する處の情夫を入れて日々飲食耽嗜數年を出ざるに其産悉く蕩盡せり。憐なるかな。闇路にまどへる人、彼貪戾の夫、不義の財を聚めて彼の奸婦に墮落の種を蒔き置きしなり。

彼鎮血男子其孟虎を欺くような魁偉なる容貌は纖弱なる女性にあまり剛くして剛柔相愛の權衡も衡合しかねてや竟に婦は嫌ふて一度離縁したりしが、政界に立つて全州を振動せしむる勢力を得るに至るや、婦は大に別れたるを悔て再縁を請ひたりしも、一度土中に抛たる杯器の水は何かで再び其器に歸らんと。宰相自らさへも此勢力を握掌する運命天より賦せられたりとは曾て圖らず。況や明見なき女子焉んぞ數十年の將來を明にすることをえむ。

晋の高僧釋道安兒たりし時、其容貌甚だ醜劣なりしかば僧師某之を愛せずして其小僧を日々田園に出だして米穗を拾はしむと。後彌々道安と其德東西に輝き千古に照せり。若し其師僧にして道安に成器を先見するの明あらば焉んぞ其容貌の醜たる其内に包む處の眞價を忘れん。

個人としても世界の歴史としても無明長夜の中に記されたり。

是神の曾て記したりしを日々に人々開きつゝあるものか、また人自から蒔し世界の園林に生茂れる根莖に花咲き果を結びけるものなるか。人は其花咲き香ふ時に、はじめて其色香のかんばしきを知る。

年ごとに咲くや吉野の山櫻木をわりて見よ花の有りかを。

我は神にあらず。此生ひ立ちし稚木に幾ばくの花開き實を得べきは豫知すること能はず。またいかに芳きを得べきかまた臭氣を放つべきかは妄りに豫言すること能はじ。しかれども旃檀は二葉より芳ばしきの諺を信ぜざるにはあらじ。

眞理は永遠に不易、法性は三世に亘りて改むことなし。世間は原因あれば結果あり、結果として原因あらざるはなし。因は必ず縁を待て成立し、縁は能く其原因を資けて萬物を成就せしむ。自然に自然界にも生物界にも悉く因果の理法常然として過たず。萬代にわたりて改めず、大にして天體の無窮より小にして么少なる生物の生滅變化の中に、整然として因果律は行はれつゝあり。

然れども自然の作せる道は微にして妙、衆生の矇昧なる之を知見するに由なし。故にはかなくも無

明の人生をたどらざるを得ず。

無明——生物心理——意志

人の精神に意志と知力の二面あり。意志の活動は衝動と感情。知力は感覺知覺及び思惟なり。意志は生物發展史によれば生物内の生活即ち心の根本なりとす。

生物の意志は本々目的とかまた手段とかを有せざる盲目的衝動として活動す。

即ち生理衝動、彼らは意識はなきも不識的自然的に盲目衝動として即ち活んとする氣のみにして生活す。知力は脳髓神經の如くに第二次に發展す。

心理學についても人の意志は精神生活發展の根本なり。一定の自己の生活を目的とする意向は生物の本質なり。一定せる生活の意志は知識感情に於て得られたる經驗の結果にあらず。

人生れて人性の意識的意志の發展するまでには三階級をなす。盲目的衝動と感官欲望と理性的意志なり。

人間も意志未だ意識的に發展せざる朦昧の間は盲目的衝動なり。かくして小兒は何も識らずして乳

をのみまた啼き動く。其次に眼耳等の感覺が眼にて視耳にて聞く。それに従つてうごく氣が生ず。この感覺欲は見る物聞く物の向ふの物について感覺してから之を取ろうとする如き欲が生ず。

理性意志は理性から生ずる意志にて、人間の自我の光としての理性によりて善惡を照して自己の感情や行爲を支配す。

生物は原始より漸々に發達し人類に至るまでは意識的の光なく盲目的に生活し來りしものなり。人類にして始めて理性の光によりて自己の目的を定めこれに依りて生活す。

人類には人性を本能的に有すれども小兒は本有の理性未だ發せざるが故に盲目的衝動なり是人性の無明なり。

それと同じく人には佛性本來具有すれども小兒の如くに、凡夫はいまだ靈性開發せざるを無明と云ふ。是盲目衝動の如し。また不識意志なり。

盲目衝動の意志に生死の原理に於て未だ覺明せざる衆生心を無明と云ふ。未だ覺悟せざる精神なり。之を唯識にはアラヤ識と云ふ。又佛性未だ開展せざるを無明と云ふ。

自覺

現世界は廣大に人類は無數なり。若し佛陀智慧眼出世し給はずば人の身體に眼無きが如く世界は闇黒なり。人は何故に生れ來りしやまた人生の歸趣する處自ら覺ること能はず。世間に善惡の因果ありて其業に因て六道苦樂の果報あることを知らず。また進んで出世間の因果として無漏聖道の因に依て無爲泥洹の果あるを信せず、冥より冥に入る衆生實に愍むべし。

經に、世の人善を作して善を得、道を爲して道を得ることを信ぜず、人死して更に生じ、惠施して福を得ることを信ぜず、善惡の事都べて之を信ぜず、之を然らずと謂ひて終に是とすること無し。又經に、道を行じて度世を得べきことを、死後に神明更に生ずることを信ぜず、乃ち生死善惡の趣自然に是あることを開示すれども嘗て之を信ぜず。苦心に與に語れるも其人に益なし心中閉塞して意開解せず。大命終らんとするに悔懼交々至る。豫め善を修めず窮るに臨んで悔ゆとも及ばんやと。

經に苦心に示し給へる如く人類實に愚昧なり。

人は宗教の光を要する者なり。譬へばいかに健全なる頭腦を有てる人にてても教育等の知能を開發すべき機會を得ざれば知識の働きを作すこと能はざる如く、人は宗教的に靈性を具有す、然れども之を開發する機會を與へざれば靈的自覺は得ざるなり。

見

惑

人生の終局目的はいかに自ら未だ終局の歸趣する處を自覺せずして人生の行路を取るものは盲目的生活なり。一日十里の行路を取る未だ何の目的地定まらずに汗を絞つて行く者有らば誰か其愚を憐まざらん。然るに世人に概して人生の終極を定めて其目的に向つて進趣する者は稀なり。若し佛陀世に出まざれば見濁の世に在て多くは唯高等動物の生活に甘んじて終るもの皆々然らん。

佛教は佛陀が世間の眼となつて自ら正覺を成じ、心靈の日光赫々照す無量光明界に在まして一切衆生を引導するに衆生の正知見を開きて自ら得給ふ處の無上正覺無量光の中に入らしめん爲に世に出給へり。然れども之を信せずして還つて無明の永夜人生冥々として塵路に葬らる。正知見の光を得られ

ぬ人の惑を見惑と云。此に二種あり。一は無明、二に見惑。

一に無明とは一切衆生共に先天的生れ乍ら冥昧にして自ら生死の淵源を覺ること能はざるは、先に述べし如く世間の知識にても知能は具有すれども教育等の機を以て之を開發せざれば知識を得ざる如く、佛性は具有すれども之を開發せざれば人生の自心を覺知すること能はぬ。是生來の根本無明也。

二に見惑とは後天的に世間の種々の學說臆測の説に惑はされて正知見を開くこと出來ぬもの、之に十見あり。五利使五鈍使と云ふ。中に五利使が大に世の有識者の却て惑ひ易き不正知である。五利使とは一身見、二邊見、三邪見、四取見、五戒禁取見。

一身見、之は唯物主義として現今人生觀若くは心靈觀未來觀等に對して大いに惑ひ易き唯物主義の説である。其代表たるヘッケルの如き、人の身體を組織する腦髓神經また凡ての生理機能の全部は悉皆無數の細胞を以て組織せられて居る。すべて細胞は元形質と核との合したるものにて一々の細胞は皆生命である。極少の生物アミンバの如き單細胞とも云べき物も生きて居る。其單細胞から分殖し竟に無數の細胞の聚合物となりしが人間の此身體である。例へば有ゆる細胞悉く單獨生活して其聚集團體が人の身體である。心臟の細胞の如きは身體から離れても數時間生きて居るが故に一々細胞の生命

の聚合して全體の獨別の生命と成ると云つて居る。ヘツケルの如きは靈魂と云ふも歸する處細胞の外にない、例へば子の生るるも父母の生殖細胞兩方から合して兩方の精子卵子の細胞生命が人の本にて靈魂と云ふも細胞であると。

尤も佛教にても人と云ひ我と云ひ生命と云ひ、物質と心質との聚合物に過ぎず、此聚合團體の外に人とか我とか生命とか云ふべきもの有るに非ずとは、小乗佛教また金剛經等に盛に主張する處である。

次に物質生命の電子生命説等である。

唯物論者は靈魂と云ひ其歸する處は物質の電子と力とに過ぎぬと主張す。物質も昔は原子を原位としたれども現在では原子は數多の電子の聚合であると云ふ。電子の聚合が原子と曰はる。人の精神なるものが電子から如何にして精神の現象と成つたり全體物質から精神も作用を成すか。然らば其物質と曰ふ物の定義何に歸するかと云はば、物質と云ふ物は主觀客觀の兩質を具有して居る。自己に活動と意識作用を起すべき性質を具有せる電子であると云はば、然らば物質とも云得るし又心質とも云得る體質に歸す。

人の精神は平素多く力を用ふる方に發達す。故に物質の方のみ力を用うる人はすべて物質に觀じられ精神に力を用うればすべて主觀的に解す。實は同一體を兩面から觀たのである。謂ゆる人間は外面よりは全體物質のみに見えて内觀すれば全體精神のみに觀じらるると云ふ如き一體の兩觀に過ぎぬ。

世人内觀の素養は乏しく外部より見る習慣性からして凡てを唯物と見るに至る。

内觀に益々深く入て人の精神の奥には實に至善微妙の靈界の存することを經驗せざる輩は實は高等に精神の進化したる甲斐なき徒である。

人間精神若くは生命を説明するに消極と積極との二面觀あり。世間も佛教も同じく、世間にも唯物論者の如きは人間の精神を研究するも物質の原子其本の電子と云ふやうに本に本にと遡り、人間に發達した大成した方面より見ずして原始の精神や卵子の本の方より成べく精神的に高等なる作用のせぬ方面にて精神の本質を説明せんとす。

分子若くは原子の聚合せぬ原子の方より見て人間の精神は聚合の團體に過ぎずとし得る限り精神また生命の價值を廉價にせんとす。佛教でも消極主義金剛經等は人は諸の聚合物なので各元素に還歸すれば人と云ふ生命も我も本來無いと云つて居る。

積極主義は精神を研究するに、大乘佛教の如く、精神の本質を觀ぜんには、天性素朴の精神は未だ眞に精神の眞實發揮せざるので眞の精神の實質は眞如の光明自性清淨虛徹靈妙なる處に精神の實質を顯現したのである。集起心、緣慮心また肉團心などは精神の眞實質萌發せぬ状態である。是の如く眞如光明顯れたる處に精神の本位とする。消極主義は精神の本質は物質の單位單細胞が生物の當體の精神の本位である。一方は精神の本位を非常に高價に價を拂ひ一は甚しく精神の本質を低値に購つて居る。

人間中の十界

宇宙全體が本一大心體にて、其中の一切を總て十法界に概括し盡す。其一分たる人間界にも、すべての人類中に上聖賢有徳の君子より下は逆惡無道の輩に至る迄の性格實に無量であるけれども、之を概括して十界に分類する事ができる。今暫らく人の十界を擧げて明さば、

人間本動物の進化したるものなれば、矢張動物の本能ももつて居る。尙進んで意識的に惡性が發達し、動物性が種々の方面に發達して十界に分類せらるゝに至る。人間も動物の分類である事は、

經に、諸天人民蠕動の類、衆惡を爲さんと欲するは皆然りである。強き者は弱きを伏し、轉相剋賊し殘害殺戮して、迭いに相吞噬す。惡逆無道なれば、後に殃罰を受けて自然に趣向す。神明記識して犯す者を赦さず。故に貧窮、下賤、乞丐、孤獨、聾盲、暗啞、愚痴、弊惡なるものあり、尪狂不具の屬もある。又尊貴豪富高才明達なるものもある。皆宿世に慈孝ありて善を修め徳を積みたるからこゝに至る。世に常の道の王法の牢獄有れども、肯て畏れ慎まず、惡を爲して罪に入て其殃罰を受け、解

脱を求むれども免れ出で得難し。世間の此目前に見る事あり、壽終つて後世に尤も深く尤も劇し。其幽冥に入り生を轉じ身を受く。譬へば王法の痛苦と極刑の如しと。

個人の十界

大宇宙の一分身たる各個人は如何に小なる生物にも大宇宙大法身に具有する處の理法は全く具有す。極小の生物は十界の性能を有つて居るけれども其は伏能として藏めり。然るに人類に至りて初めて顯動態と成りて來た故に、個人に十界の性能が具備して居る。先に述べたる如く一念の殺意は是地獄の心、乃至一念歸命の心は是佛心、是れ即ち伏能したる心が縁に隨つて現行するに外でない。各個人の頭腦に十界の性を具するに就いては、骨相家の主張する如くに、人の頭腦に上は仁慈性尊崇性より、下は男女性破壊性等に至る迄、種々の性分が頭腦中に其性分の部が定つて有るとは肯定し難きことなれども、人の頭腦中に四十二性乃至五十六性にも分けることを得らるゝ性分を有つて居ることは疑を容れぬ。

地獄の三階 家庭と國家と大宇宙

世に宇宙の大法と人間との關係に就いては未だ何の考慮をもたぬ處の俗輩の云はるゝには、何の宗教でも惡人は地獄に墮ち未來の苦を受くことを説くけれども、予輩はかゝる處の實に在らうとは信ぜられぬと。然れども現在に地獄が在つて此に墮入たる時は、應分の苦罰を受けることは疑を容れぬ。現に監獄中に呻吟し苦役することは目撃する處であるが、尙此外に宗教家の説く如きの地獄あることは信じ難しと云ふものがあり。予は其人に對してかやうに説明を試みた。

貴氏は現在國家に在る地獄を信ずることが出來れば、尙氏の精神にして一步進むときは大宇宙の地獄在ることも信ぜらるゝやうになる。今氏が爲に地獄に三階あることを話して見よう。曰く家庭と、曰く國家と、曰く大宇宙と。

先づ家庭の地獄とは正しき家庭には、父母其小兒に對して善を獎勵する爲め善事を作せば褒美を與へ、惡しき事は戒むる爲めには閻室と云ふ地獄にも容れざるを得ぬ。憎いが故ではない、可愛き子を

善良に育てんが爲めである。漸く年五六才位の兒には國家の地獄の恐るべきことはいまだ分らぬ。若し地方の小兒に對して云ふに惡を爲すと横濱の監獄に入れて赤き衣物を着せると云ふても、小兒は横濱と云はゞ好き處なので赤べ々と云ふは還つて悦ぶのである。故に幼稚の小兒には家庭閨室の怖るべきを感じれども、國家の地獄の痛苦と云ふことは未だ分らぬ。

已に青年已上に成りてからは、惡を懲戒せんとするも家庭の地獄では効能がない。依つて國家の地獄に墜して苦罰を與へて懲さゞれば矯正は出來ぬ。國家の地獄の上に宇宙大法に依つて成り立つて居る自然の大地獄が理としてなくてはならぬ。如何となれば國家は即ち宇宙の一部分である、一分なる國家の法としての地獄は宇宙の大法則に基いてゐるので、人が國家の地獄を知りながら其宇宙大地獄の在ることを了解できぬのは未だ其意識が幼稚で有る故である。恰も小兒が家庭の地獄あることを怖れて國家の地獄あることを識らざると同じようなものである。

小兒が成人して知識が進むに隨つて國家の地獄あることを識り得らるゝ如くに、貴氏は未だ理性亦靈性が幼稚であるから、宇宙の大地獄が信ぜられぬのである。今に宇宙の大法が能く解せらるゝまで意識が發達したなら、大地獄の存在を信ぜざるを得ぬやうに成ると話した處が、成程然であるかと云

はれた。現代は人爲則の法律などには随分能く解する腦を有つ人は澤山あるけれども、宇宙の大法則の解る人が少いのは傷しいわけである。

尙地獄は人々精神中にも存在して居る。若し隠れて惡を作し罪を造り居れば、假令他人は之を知らざるも、自己心中の怖畏心は事に觸れ縁に隨いて感ぜざるを得ぬ。

閻魔王も人の精神中に良心として存在す。惡を爲す時は後の良心呵責は己を誡むる法王である。惡が病的と成りて良心滅亡したるやからに至つては、閻魔からも已に地獄の宣告を受けた族である。

閻魔王の法庭には罪人の生涯造りたる罪を照す淨はり鏡が懸つて居る。若し此鏡に向ふ時は己が一生造りし處の惡業が明かに見ゆると。實に然り、人々自己の心を静め冥想して明かに自己の既往の罪惡を反照するときは、己が心の淨はりの鏡に歷然として現はるる。然るに世の人自己が淨はりの鏡を顧みず還つて之を疑ふ。愚ではないか。

我窟の魔

人の我窟に三鬼神ありて人の精神を横領す。飢渴神と貧慾神と怠惰神となり。甲は肉慾を主とし、乙は財慾を司どる。

此三神に其精神支配せらるゝ時は、此三神は人類を餓鬼道に誘導せんとの第二の惡魔は之より遣はされたる魔鬼なり。人の精神に此魔鬼宿る時は微菌が其身體に附植して養分横奪せらるゝ如く、此魔鬼人の精神にあつて道德的性能を劫奪せらる。此三者に其全心奪はれんか餓鬼道に墮落せんこと免るべからず。

鬼に多種あり。鬼道に墮する輩は假令法律の罪人を免るゝとも道德上の大惡人たることはのがるゝ道なし。

我慾餓鬼また財慾餓鬼とも云ふ。金錢財物の強慾無道。彼らは己が我慾を充しめんが爲に、他人に害を與ふるを厭はず、排他的忘他的即ち己が慾の爲には他を排斥し又己が利の爲に他人の迷惑も忘れてしまふ者。經に所謂の富者にして財産を山に積みなすとも、之を公共の爲にも慈善事業にも投ずる事能はず。此らは唯財を積むは我慾を充しむる器具なり。人の蓄財の觀念が自己を天地の一員として天地に盡す、天地の爲に天地の働きを充實し天地に報いんが爲に働ける酬として得たる財産、己を國

家の一員として國家の爲に正しき働きを以て財を造りて國家に酬ゆるは人道的なり。只天地の爲にも國家の爲にもあらず、只己が我慾の爲に財を蓄ふるは餓鬼なり。實業家が法律の犯罪者たらずとも道德上の罪を犯して不正の財を起し弱肉を食んで己が財囊を太らしむる如き、また勞働者の汗膏を擡上げて己が華奢の料に供する人の如き之なり。

修羅。カーヂナル、リセリユーは政治家、自ら大詩人と思はれたき奇癖ありし故に大戲曲家コルネーユの聲名を嫉み、彼に對して惡評を書くべく命令せり。故に同氏に媚びる人、彼の快意を買はん爲に貴氏は大詩人、優雅の精神に富めりと語れりと。パートワルポールは胸中阿諛の念なきも且つ當代無比の義俠心雅優心に富める人と思はれたしの弱點を以て他人に翻弄せられたりと。

無明。老畫伯あり。嘆じて曰く「天よ予に過なし。既往に於て一層優れる法を講ぜざりし罪を宥し給へ」と多くの人は既往に成せし事を回顧して嘆ぜざる者はなからん。

畜生。人間中の畜生とは如何なるものか。畜生は即ち動物である。人類も本動物の進化したる生物であるから、榮養とか生殖とかの如き或生理上の働きは動物共通である。假令人間と生れても高等なる精神が發達せずして、動物性計りが發達するときは還つて惡智慧發達した動物である。道德倫理も

なく社交上の仁恕もなく義理も人情もなき社會の義務の感なき如きは人身獸性である。同じ人中の動物なる浮氣の禽の如き横暴なる虎狼の如きあり。公平の道理を毫も解せず、己が思ふ一圖なる痴漢にして蟲のやうな族もある、又猿智慧の族、人を欺惑する狐の類、恩を知らぬ狗子の如き、執念の深き蛇の如き、衆人に嫌はるゝ蛇虺に比すべき人身の動物類にあらずや。

さればとて進んで地獄の猛烈なる熱火に焼かるゝ程の惡人でもなく、肉慾我慾の動物とて餓鬼道と迄も惡が發達せず。進んで人間の資格を有したるにあらず、本能的の動物性の重き處の性格なるものは實に人中の畜生である。

修羅。人間界の修羅道とは、修羅とは本三善道の中に下品な性格なので、傲慢勝他の性、本より其内心に高尚なる理想遠大なる希望なく、只驕慢勝他の性から衝動する行動、慈善をなすも只名譽の動機により、道德的行動あるも勝他の爲よりなす、偽善偽徳を以て名を釣り權威を追ふ、内に誠實なく外賢善を衒ふ。

經に、慘賊鬪亂、誠實なく、尊貴自大にして己れ道ありと謂ひて、横に威勢を行じ、人を浸易して自ら擧高して人の敬難を欲み、天道を畏れず實に降伏すべきこと難しと。

斯の如きは修羅道格とす。又勇のみありて知と仁に缺けたる豪傑の如きは是である。

ナポレオン、カイゼルの如き楚の項羽、平の將門、織田信長の如き己が國の爲には人道を亡す如きは人中修羅道王たるものならん。

人道。假令人間の身たりとも人格具らざるものは眞の人間と云ふことが出来ぬ。若し人間に生れた已上假令自恣に育つとも自ら人格を具備すると云ふことは難い。本能自然主義を唱導する類あるとも、そは人間は本能ではない。淘汰薰修せなければならぬ生物である。喩へば鑛物中にも天然の儘にて使用すべき石あり、琢磨せざれば光輝の發揮せぬものある如く、他の動物は本能に育てば充分であるが、人類に至つては高等なる鑛物と同一訓練の要ある動物である。人類は精神生活の中理性が發達して而して自己の理性が自分の肉慾などの慾を抑制して而して人道を履行するにある。

若し人間であるから天然のまゝに恣にすも自ら人格具るものとすれば、教育の中に修身科の要はない。豈然らんや、薰陶宜しきを得なければ人格は具はらぬ。例へば國民教育の教科書に古來の道德上立派な人物を擧げたるは、人間にして眞の人格具つた人物を標榜したのである。支那の孔子の如きソクラテースの如き人道的道義の聖者である。洋の東西を云はず人道を中心としての道義は即ち人間

中の人道の唱導者である。キリストの如きは天道的道德、道德の根底を天の神より割出して居る故、天道的道德と云はん。中江藤樹や伊藤仁齋、貝原益軒、二宮尊徳の唱導する指導する處は即ち人道を人間の中心として道德の標準として立てゝ居る。

天道。人間中の天道とは公平無私仁慈博愛有徳の君子、人間中の最高等なる人格なり。

假令靈性を開發して神人合一靈格と云ふに至らざるも人格上最高等なる有徳君子なり。天は公平無私、天の恩恵を被らざるものはないが、天の恵に對し感謝の表はすものも有れば一向天に對して禮せざるものも多い。然るに天は平等に偏頗なく愛撫し、日日恵みを一切の人類に及ぼして居る。彼の天の意の如き君子あり。國家の爲め人類の爲めならば己が身を犠牲にして盡す。堯舜禹王の如く人民を子の如く愛撫し世の爲に自らをいけにえにして世の幸福を施す。仁徳帝の民を愛する、仁主が寒夜に衣を脱ぎし如き寔に是天中の天と謂ふべし。亦賢臣名將にして己を忘れて國君及國家に盡す和氣清麿の如き又楠氏の如き、國の神と祀らるゝ人は皆是人中の天と云ふべし。或は電氣又蒸氣等を發明し天の機を人類に啓示したる如きは宜しく天使と見て然らん。又ナイチンゲール忍性上人の如きは人中の天使と云ふも可ならん。

漢の楊震仁義の道を守り其智恵巧、時の儒者關西の孔子と呼ぶ。東萊郡の太守となつて行く道にて、昌邑の令王密先きに恩を受けたるを以て、夜中密に旅宿に見舞ひ禮を述べて黄金十斤を捧ぐ。楊震大いに驚き天知る地知る我知ると云ふ。

源頼光の徒渡邊の綱、定光と羅生門に鬼神あつて人を悩ますと云ふ、何共合點ゆかず誰か實否を見届けんと云ふ。時に綱我馳せ往きて鬼神を討取らんと、ゆく道すがら思ふ。人ならばいかなる強勇にても後は見せじ。然しまだ變化に出合す心もとなし、されば引返して何事もなかりしと云はんかと思ひしが、それでは勇もなく信もなしと我心に恥ぢ入つて一首、人ならば無しといふともありぬべし、心の問はば何と答へんと、くちずさみ羅生門に至り鬼の片腕を切る。

心に十界を具し十界を造る

或る他の説によりては、人の性は善なりと、亦惡なりと。然るに佛教に於ては、性具十界とて、人の性には、迷と悟、善と惡と十界の性が悉く具有して、働きの強き方を造り出すと云て居る。

各自の心に十界の性を具有してをる故に、縁に觸れば鬼の如き恐ろしき心も起る。是地獄の性なので、亦他人の榮を嫉み亦慳貪の心は是餓鬼の性、愚痴横着は畜生の心、憍慢は修羅の本にて、人いかに墮落に沈みても良心の責あるは人の性である。慈善や公德心あるは天道の分と云ふ。又眞理を聞けば悟りたいと思ふは是聲聞の性あるからで、人生の歸着を明めたいと云ふ如きは緣覺の端である。無佛論者でも絶對時には自ら稱名の聲を發す。是佛性あればである。

人々十界の性は具さに有ておるが、中に就て何れを造り出すかは種々の因縁から其生涯の業に由て決定することになる。之を理に十界を具して事に十界を造るといふ。

地獄界。三塗（づ）の中に火塗と云ふ。八大地獄乃至數多の地獄あり。罪の輕重に依て苦を受けることと同じからず。然れ共皆烈火に燒る苦あり故に火塗と云ふ。大焦熱無間等は最も劇苦の處、是十惡五逆の業による。邪見逆惡の業に由て倒さまに落て極火に燒かる。己が罪業の薪ある限りは火消ゆることなし。之を地獄と云ふ。

餓鬼界。山林塚廟に祀らるゝ鬼神もあり、又不淨處に在て飲食をえずして飢餓の苦しみ、鞭打を受く、刀劍を以て截らるゝ如き苦あり、故に刀塗と云ふ。有財餓鬼あり食物を見乍ら口少さくして噉ふ

こと能はず。是昔財を積むこと山の如きも、我慾の病的に陥り益罪を累ぬるに由る。無財餓鬼は飯食を求む。我慾の病的に陥り罪を累ぬる報である。又無財餓鬼は飲食を求むれども得ず、飢餓に苦しむ。是宿世に自ら活業を勉めず、而して酒に耽り色にすさみ、肉欲の病的なるを因として此身を受く。

畜生界。動物相互に吞噬して血を流して苦をうく、故に血塗と云ふ。天理人道の正しきを行はず、横暴なる業から横さまの身を受く、故に傍生とも云ふ。羽毛鱗角乃至昆蟲等に至る迄三十六億の種類ありと。世間に身は人間に受乍ら横暴なる、虎狼に等しき族あり、又犬の如き破廉恥なるあり、又狐の如く人を魅する漢あり、形は人たるも其情操と行爲に於ては畜生類よりも甚しきあり、かくの如き因あれば必ず畜生の果をうけん。此の三道上中下の三品に分ちて三惡道とす。

修羅界。此界に生るゝもの、常に鬭諍を事とし勝敗定まりなく、相互に競ひ合ひ恐怖の苦やむこと無しと。世に嬌慢舉高の野心家、上はナポレオン、カイゼルの類、下りては世の野心強き者、身の分を顧みず、名譽の奴隸權威の争ひに逐鹿の鬭をいどみ、彼等内に誠實なく仁心なく外賢善を装ひて自ら是とする輩、斯界は惡道には非ず、偽善偽徳下品の善である。

人間界。縱令形は人類たるも人格具備せざる者は未だ人たらず、亦身を人間に受けたる者、自ら人道に叶ふものとせば教育に修身科の必要はない。佛教の五戒又儒教の五常に契ふ人は人格具はりたるものとす。世の教育及び道學等は人道を標準とし、天道また成佛的の道德とは其の歸趣同じくない。人道教育は全き人間を形成するを目的とす。

天上界。六欲天と色無色との禪定天とあり。

人格の因と縁

人の心は極めて複雑なるもの、此の一身中宛然一大帝國をなせる觀あり。其の帝國內に帝王大臣百僚より庶民に至るまであり。

野心、情欲、謀反、利害の觀念黨派ある等紛々擾々たるが如し。謀反の民不軌の臣ありて存せり。若し之を放任せば人心の帝國は宛然無政府時代の姿となり。人格全く消失し去り、自我は煩惱の奴隸とならん。是餓鬼と畜生にして、全く人格燃盡せるものは邪見逆惡即ち地獄に墮せるなり。

人格の因。

因に資因と習因とあり。因は自己の固有性。資因とは遠くは天賦近くは父母の遺傳に稟けたる先天的素性。習因とは周圍の刺激によりて形成せられたる習慣性即ち第二の天性なり。

其の因たるもの、其の本源を原ぬれば因縁の所成たらざるはなし。天性一大因性は超人間たらん。然るに其の父母また祖先より外部の境遇の縁に規定せられて因縁相待つて其の子に父母は遺傳す。故に同じ父母の生む所の同胞たりとも其の因と縁との關係は決して單純なるものにあらずして最も複雑極りたる因縁によりて形成せられたる結果として生れたるものなれば其因縁に墮つて所生の同胤同一ならず。

天賦の資性と云ふなれども此には父母また遠き祖先よりの因縁の相異りたる關係によりて形成せられたるものなれば之を原因遺傳として持ち來るは即ち因なり。

モンテスキュー氏が曰く、人の天賦の資性上全く除去すること能はざる傾向を有するものあり。然れども教育によりて之を矯正し利導するは絶對的不可能事にあらずも、全く之を改變することは殆んど不可能に屬すと。教育の力之を如何ともする能はず僅かに屏息し隱蔽するに過ぎず。天賦の資性

は全く根治すること能はず。云々と

親は其子に其の性質を長短共に遺傳す。

人の血族累代に至りて、其の祖々の性種々の因縁によりて複雑なる諸の成分を形成して、身體の強弱より其の性質性癖に至るまで數累代に因縁を以て作られたり。其の因縁の關係は實に複雑にして容易に判すべからず。然れども善惡ともに其の祖に有したる弱點は早晚其の子孫の上に顯はるるに至らん。

其の惡素質が伏在するとも身體の發達に隨ひて或る時機に開發するものなり。然れども其性遺傳せる性分とても本と因縁所成のものなれば、また強度の資縁を以て之を矯正する時は何ぞ改善せざるものならん。

然れども人の遺傳的肉質的性分の其の根本的源底に於て、超人的心靈の性伏在して因縁を待つて内發的に發動せんとするの勢あり。此ぞ人の道德的理想にして向上せんと欲する心なり。人の良心是なり。

人の靈性は因縁所成の性質を指導して至善に向はんとす。内に靈性あり、外に靈性より發現せる光

なる教育あり。

人格の縁。

人性の原因たる遺傳には種々の弱點を混じ來りしなれども、また祖先代々の向上し來れる美質に於ても、同情廉恥の如きは非正邪を分別する如きの人道的性質の要素已に具備せり。然れども人間は他の動物に比して本能的にあらずして教育を待つて完成する。

そは金石の類にしても自然に其の美の具はれるものとまた琢磨を待て初めて其の備はれる美質を發揮するものとの別あり。寶珠寶石の如きは琢磨の功によりて光輝を放つ。人は最高等生物にして寶珠寶石に比すべし。自己に有する性能が教育訓練によりて發揮すべし。

人は原始の人類より數萬代に亘りて外界の事情の縁によりて進化發達し來りしもの精神的に勝を得たるの結果、他の動物を凌駕して獨り超然として拔群たるは、自己と外界即ち社交的となりて彼此相待の精神的關係の發達せるによりて、各自が競争的に進化し殊に勝れたる精神のすべてを刺激して發達せり。

人の精神原因には外界の刺激によりて發達すべき可變性また受稟性存せり。有機組織にも心理能力

にも周圍の事情によりて形成せる結果に於て其の趣を異にす。原因性は石材にして縁なる教育訓練は彫刻の如し。故に之を彫刻のいかにによりて種々六趣何かに形成するに至る。之を形成する外界の縁は種々雑多なるが故に千態萬態、其の精神狀態に於て或は進化し或は退歩し、此に於てか六凡善惡無盡の生物を變作す。

原因即ち過去また父母より稟けたる性素質は材料のみ。四圍の境遇の縁を施さるるに依りて變化す。本より其の材料に於ても善惡何れにも傾き易き性能を具備し、其の稟性の因に相應する處の縁なる職業また教育等を施す時は適するが故に成し易し。

原因の性は外縁によりて其の影響を及ぼさるべし。

人は生れて幼年より其の身體にも心性にも外界の物質的影響を被り、其の風土また風俗習慣大に其の面目を變ず。氣候空氣食物等の爲に影響を受く。例へば田舎に育ちたる小兒は健強なるもの多く、都會の子供は柔弱なり。日光直射と新鮮なる空氣を受くる人は健康にして其の反對なるものは不健康なり。また風土の影響は人の精神にまで及ぼすこと大なり。學校と社會と家庭との教育が其の子弟に及ぼす處の助縁もまた甚だ力あり。其の家庭に於て其の父母が日日の身の行爲と口の言語と意の思想

との所作、行住坐臥一舉一動に至るまで悉く其の子女に對する模範たらざるはなし。少年の心は土偶の土の如し。父母の模塑に隨て形成す。

六道四生其の模塑に由て成す。また慈母の溫なる愛の手に養はれたる子は精神暢伸し氣象快活に、繼母の虐待を受けたる子は心屈して意地惡し。寵愛適度を過ごしたる子息は我儘にして自分勝手なり。同胞多くして不自由勝に育ちたる者は相互に愛深くしてまた貯蓄心に富めり。

因

唐辛子の種子は唐辛子と爲り林檎の種子は林檎となる如く一定せる遺傳的生命を有せり。凡て人は祖先が傳ふる所を稟く。是即ち生理的方面の原因なり。父母の因縁より成たる結果の胎兒が即ち原因として人の遺傳的資性の良否は之を縁の力によりては如何ともすること能はざるものゝ如くなるも、天稟の資性は除くこと能はざるにもせよ、縁なる教育利導の力によりて絶對的不可能とは云ふ可からず。唐辛子の種子より唐辛子を生ずる如き、資性が善に惡に傾向あるは免れざるも、親は其子の肉と

其氣質に至るまで美質缺點を傳て相續せしむ。

祖先よりの生命を遺傳するの血脈なるものは山上より溪谷に流れ入る水の如し、其流るゝ所の途中の土質によりて種々の成分を含む。即ち硫黃質また鐵氣等を含む如く其の過ぐる處の土質によりて水質を種々にす。祖先來流れ来る代々の性質如何は稟け出る人に善良又は惡質に變ぜる如き各個人の性質の特殊的なるは其本源を過去の諸成分中に原因す。過去數千代に亘れる歴史より血脈管を貰いて或は純潔又は汚濁となり此に養はるる肉體隨て強弱健不あり。其肉體の成分に於てさへ其の性格の上に関係を及ぼす。其人の性癖に於ても血肉との因縁を絶つ能はず。祖先より累代に善良なるもの純潔なるものとせば、其より流出せる子孫は必ず善良なりとは斷定す可からざるも、祖先の惡質は早晩其子孫の性質上に顯はるゝが如く、遺傳的素質を稟けたるにもせよ人の一大天性は生理の遺傳已上に存在して人の精神の奥に潛伏せり。

故に人は形氣と習性に於てこそ惡なるも、其本性には美德に進まんと欲する性情は如何に墮落せる中にも在るなり。理に十界を具し性惡を具するは、是人には靈性と肉の性とを具して、常に本一體にして反對の方面に向つて欲望す。こゝに於て戰鬪する所以なり。

緣

人は生れ乍らの原因即ち遺傳として持ち來りしのみにあらず、緣により、教育等の緣によりても善惡の方面を成す。

人には先天の理性と共に又外界の刺激によりて初めて成する所の感性あり。玉石の琢磨によりて其の有する光を放つ如く、又人は緣即ち四圍の境遇に感染し易き性を有す。其薰染の力はたとひ其天性を根本的に改變せざるにせよ、習慣の性として第二の天性を成す。

人の認識に於ても本白紙の如く感覺よりの經驗によらざれば記憶印象なく言語名字なし。

人の可變性は緣を待つ性の性なり。其有機的組織にも其心理的能力にも四圍の境遇によりて其結果相同じからず。一切の言語文字より記憶印象風俗習慣の如きは悉く緣によりて成す。人は幼少より不斷に外界の刺激に應じて日に其面目を改めつつあり。

風土因緣。外界の緣に影響を受けること最も深きは幼年時代なりとす。此時人は心身とも外界の刺

激に應ず。氣候空氣食物等の爲に面目を變ず。田舎に育ちたる子供は都會に養はれたる少年と大に異り山野の人は強壯にして都會の人は虛弱を常とす。陽氣の處に栖む人と陰氣の中に住する人とは其顏色及び健康に異あり。新鮮なる空氣を吸入する人は顔色麗しく不潔なる空氣の裡に勞役する人は其血色憫むべし。此等の例を見るも四圍の物質の縁が人の身心に及ぼす關係大なりとす。因獨り成らず縁を待つ理誰か否定せん。

周圍の事情自然的なると又人間的知識的なるとによりて開展す。言語生活悉く其國民の形式を則り其國民の風俗習慣に淘汰せられ、學校にて教育を受け教會にて教化せられ又其社會の薰習を蒙り、終生其薰習の勢力を除去ること能はず。社會は彼に言語行爲を以て示す。其言語行爲は社會の縁によりてす。個人の資性發展の風俗習慣等は時代國民兩親朋友社會の爲に規定せらる。個人は社會の縁に依て造らる。

人の道義的因縁にも、其交はる友により慈母の膝下に養はれたる子は心志伸びて氣象快活、虐待を受けたる子は心屈して意地惡し。教育によりて柔弱とも成り、寵愛過ぎたる息子は氣儘にして、兄弟多くして不自由の中に育ちたる子は貯蓄心に富み愛情深し、無教育に育ちたると道義的教訓に養はれ

たると大に同じからず。斯の如く人は其先天的傳遺的生命の原因より稟けたる資性も後天の教育四圍の事情宜しきを得ざれば惡化するの恐なきにあらず。人が六道四聖に分れ善惡迷悟に別れゆく因縁以て知るべきのみ。

若し幼少より父母博學にして又家庭教育に注意し幼少より學問を授けられ會話の中にも知識を開發すべき動機となるもの多くする如きは、自然に兒の知能開け知識欲發達し、後來大學者となるべく又大發明者と成るべし。知識的因縁は父母教師讀書思想言論主義に至るまで吸收し或は全く同化し或は之が自己の主義を發見するの縁となることあり。

縁を以て因を矯正す

境遇の事情に自然薰習すると無意識的なるとまた意識的に教育せらるるとあり。意識的なるは殊に勢力強し。たとへば青年子弟の品性に及ぼす因縁、性來の惡癖を矯正して善道に向け性質の弱點を改革せしめ、其柔弱なるを鍊りて勇壯にし、亂暴なるを溫良となす如き、教育者にして堅忍持久の精神

を以て實行せば必ず效驗空しからず。其教育には兒童の爲に仁愛以て兒童の情を暖め、學識以て少年の知を開き、獎勵以て其志を強くする如き、至誠なる教育の力は資性習性をも改正して其面目を新にするに至る。

因緣所成の理

上に説來る如く、人は外界の緣によりて造らるとするも、無機體機械の如くに外界に規定せらるるに非ず、自己の内面的活動の因性ありて、外界の助緣によりて生成し發達す。

自己の身體發育は自己に内的因性ありて、發展の初期にありては物質的影響を受くること多きを以て、益々發達して後には因緣成立せる自己の意志によりて自由に周圍の事情の因緣を變化することを得。

人は幼にしては動物と同じく他動的なりしも、人的意志發展してよりは自由意志を以て自己を形成す、終生他動的なる人は人格發達せざるが故に他の動物と同じ意識状態にあるなり。

人は善惡共に其初期に於ては自然的因縁に規定せられて惡人とも善人とも成り得。其因としては祖先より犯罪に感じ易き素質を遺傳せられ、性慾に道德缺乏の資性を有し、加ふるに社會は彼に墮落すべき機を與へ、惡友の誘惑に會ふ時は之を抵抗するの意志なく、家庭に於ても境遇に於ても共に罪惡を矯正するの機會なく、遂に斯る犯罪人となりて圜獄に呻吟するの果を見るの悲境に陥れり。

罪惡の遺傳生命を因とし、家庭及び境遇の縁に養成せられて、其結果は犯罪人として自ら縲紲の苦果を感じ罪人として世に擯斥せらるるの報を受く。人は精神發達の初期には、善惡共に他動的なるも次期に至りて自由意志、自ら善惡を撰擇するの意志を以て、自動的に何にも向ふことを得べし。少年は全く他動的なれば國家も恕して刑法にも罪を論ぜず、成人の後には、全く他動的にして他より規定せられたるのみの人ならば、そは他の動物と同じく全く人間にあらざるなり。其等の精神は所謂傍生の性格に屬すべきのみ。

因果應報は必然にして、家族が假に犯罪の資性を遺傳し社會は罪惡に誘惑と機會とを以て與るが故に、其報應に其父母等は犯罪人と同じく汚名を被むり、又誘惑の機會を與へたる社會は其罰として犯罪者の爲に劫奪殘害の恐怖不安を招き、數多の金圓を費して監獄費に給するは社會が受けたる報にあ

らずや。

人性は善惡十界の性を有したる一大原因の性は佛性にあり。加ふるに物質的の體を稟くるに祖先來の種々に染りたる形氣的生命の中に清濁混雜たる性を遺傳せられたりとも、自由意志ありて自己が自己を規定すべき使命を以て人間に生れ來りしものなれば、其の善惡にも自己に責任は免るること能はず。又社會には善惡何れにも誘ふべき機會充滿せり。教育あり教會あり、然るに自ら闇くして光明に向つて道を求めざるより惡道に沈淪するは是誰の過ぞや。

生命の向上は人間の責任

佛敎にては人は思と云意志を以て能く履むべき道を分別して惡を避け善に進むべき本務を有する生物なりとす。人には人間的性質が發達するに隨て自由意志ありて自動的に惡を却け善に向ふべきの靈性あり。善惡十界に區別して其因果の理を示すは、三惡四報の業道を轉じて靈的正道に向はしむるにあり。人生は向上の心に向つて生れ來れり。然れども自ら自性の惡を却け自ら正善に向上せんとの原

因たる意向なき時はいかでか其望を達せん。

自己の弱所を自覺せんには其發生の原因を究むべし。修養上極めて必要の事なり。性癖習性とても不治として自暴自棄するなかれ。

宗教の要

宗教は一切人生の眼である。人生觀未來觀宇宙宗教觀等すべて人類の精神を照す光明は宗教である。若し人間が此世の人類が各自然に正知見の眼あつて自己を覺して自然的に大悟するものならば宗教の要なきなり。宇宙の自然に明きものならば日光の要なし。人生は本來闇黒である。自己を覺すること能はず。云何に行爲するの眞理なるを覺明せぬ。故に宗教を以て世の眼と爲りて人類を如實に指導すべきの任務あり。

煩惱濁。人類に脱却せねばならぬ弱點を有す。故に宗教の要あり。人類又動物である。高等に進化したる動物である。故に動物欲を持つてゐる。精神の正善の方も發達したると共に罪惡の方も發達し

て居る。若し自然に捨て置くも自ら弱點を脱却して菩提と爲り得るものならば宗教の要なきなり。然らば肉慾我慾は何人も有つて居る。之を脱却し靈化する時は煩惱即菩提で邪惡も轉じて正善と化す。是佛教の要ある所以である。

衆生濁。相互の我と彼と向つて因縁して惡道に誘致する墮落し惡を増長せしむる勢力存在する故に宗教の要あり。内に煩惱あり外に誘惑機關あり。解脫淨化するの佛法あるも、迷ひし世は三惡四趣と化し去る。社會生存競争は益々各自内より煩惱を増長せしむ。腐敗せる社會は種々の雜毒黴菌發生し、恰も肺病や花柳病の黴菌の病毒は交際繁多の處に傳染する如く、精神の毒菌も衆生濁の因縁混雜せる處に傳染す。常に宗教の防腐殺菌を以て社會を救済するに非ざれば心靈上健全なる社會をなすこと能はず。田舎の空氣流通よき處に流行病少く都會に流行病蔓延も迅速なる故に衛生も隨つて嚴重なる如く世は人類益増殖するに隨ひ交通繁く益惡毒流行が激しき故に宗教は益奮發せねばならぬ。

大經五惡段は能く濁惡の社會に立ちて奮闘せよと獎勵し給へり。

一切人民蠕動の類衆惡を爲さんと欲す、皆然らざるなし。強者伏弱轉相剋賊殘害殺戮迭相吞噬善を修すを知らずと。

五 痛

經に、佛陀彌勒菩薩に仰せらるゝに、吾汝等に語り聞かせん。此世のさま五惡の苦しみ惱みをなすことかようである。五の痛みと五の焼かるゝ如きの苦みとはめぐりめぐる輪の如くに、自らつくりし罪は苦みとなりて受けなければならぬ。ただすべての惡ばかりをなして善本を修めずしてみな悉く自づともろゝの苦き處に入らねばならぬのである。或はそれが今の世に於て先づわざわいや病をかうむりて、死なんと思ふもできず、生きながらへんと思ふも之を得ぬのは、罪惡の招くところ、人々之を見つゝあり。又身まかりぬれば、その行ひのいかゞに隨うて、三惡道に入るので、苦しみ、なやみ、はかりなくして、自ら罪のたきものに焼かるゝこと、その久しくして後に至れば、又共にめぐりあひて、そのうらみをむすびあふ。少しばかりのことより起りて、遂には大いなる惡ともなる。

そのもととはいはゞ、皆財と色との欲望よりして、道徳のためには恵み施しなどすること能はざるによりてなり。くらき欲に迫まれ心の意志の欲望によりて、心のなやみにむすぼれて、解けやむこ

とは無いのである。利己主義にして、我欲のために己を厚うして、利を争ひて道德のいかんをも顧みることではないのである。権力と豪富榮華などの時には傲嬌にして、愉快なりとて、我憍を逞うして、ものに耐え忍ぶこと能はざるので、道德を修め慈善をせんなどゝは、その志いささかも無いのである。

威勢も榮華もいつまでもあるものではない。

歡樂極つて哀情多し。やがて身を勞はし苦に落ちて久しくして後には又はなほだしくなる。天の網は見へぬが空に張りつめていかゞしても網の目をのがれぬ。自分のわざに相應せる網の目にかゝる。今もむかしも、この理ばかりは、即ち天則は、かわることは無いのである。痛ましいではないか。また、いたましさ、いかがにおもふや、かへり見なされよ。と。

行 蘊 魔

行蘊とは行爲の心理にて即ち意志のこと。智力にも感情にも意志は離れず人格の高下を定むるものである。意志の向きかた性質は十人十いろ、其好む處其性格が同じからざることとは面のさま／＼なると同じである。而して意志の地盤が、最終根底偉大なる基礎の上に立てるものなれば決して魔のために侵されざるも、無宗教の人の意志は我を基礎としての我意である。其理想と云ひ希望と云ひ卑劣なること免れず。浮世の義理などのために動かされて世の爲に搖ぎやすし。かゝる弱所に乘じて、行魔が人の意志に托し、ついに惡魔のために誘惑せられ捕虜になり、人格を墮落しつひには三惡道に落つるにいたる。かゝる人に對して意魔の障を降伏して其心靈を復活して、凡夫を轉じて聖者たらしむるものは如來の降魔成道の増上力なり。人己が我意の薄弱なるを捨て如來の無上の力あるを信じ之に一任し、我意を聖旨に歸服する時は、意志の最根底たる心靈開展し、如來の神聖正義なる聖旨の司導の下に行動し、意志をして益々至善に向上せしめて靈化し給ふ。

人の意志なるものはいかにして薄弱なるかまたいかにして世魔のために便を得られて人生を過らしむるであらうとなれば、肉我の意志なるものはつまり、肉慾我慾の肉の幸福を主義とし、我意は唯肉の幸福を最上の目的としあれば、其理想とする處其希望する處要するに肉我の満足を求むるに過ぎず。意志を肉の奴隸とし畢生肉の犠牲となるを自ら甘んず。情操と云ひ意向といひ人生の墮落を司る惡魔のために誘惑せらるゝのいかに容易なる性能なるぞ。

高等なる宗教心即ち如來の聖旨は人の意志を靈化し益々向上し無上菩提を得せしめ人の意志を聖者たらしむるにあり。

聖者となることは肉我の幸福を求めんとするには甚だ不利益なれば、殊に靈我即ち聖にして勝を得むか、肉我はつねに靈我に服従し毫しも自分勝手の欲望に満足をゆるさざるなり。

意志に對して如來は眞理の神聖なる光明を以つて人の意志を靈化し、正しき聖き道のなかによき道を歩ましめ、限りなき生命無上の幸福を與ふ。

肉我の欲の意志は其根底微弱なるが故に、縁の方に動き易く、故に八風の爲に搖かさる。かゝる肉の弱き意志の虚に乗じて魔は侵入して意志を變じ性格を轉じて人格を墮落せしむ。

人の意志を高尙にする理想又遠大なる希望によりて人格を高等にする自利利他の菩提心を破壊して人格墮落せしむるものは魔なり。肉は惡魔の誘惑に感じ易し。

世に八風てふ魔氣あり弱き意志を搖して輕毛の如くに左右す。八風とは何ぞや。利衰譏譽謗稱苦樂之を八風と名づく。利とは肉我意の欲望に満足を與ふる力にて、肉に幸福を與ふる器金錢及びすべての財人を滋養する處の財物を得ることにして、利のためには義を忘れ他を顧みず、爲に道德より墮落するものなり。

利てふ風が人の食欲の火を煽動するときには、欲火熾にして竟にとまる處なからしめんとす。利の爲に思の動かざるを聖と云ふ。之が爲に動かざるゝを凡夫と名づく。凡そ世に利欲なるものほど人の心を染汚ならしむるものはあらじ。食欲に染まざるものは汚中の蓮の如くに潔し。佛陀の身相好光明端正なるは利の爲に汚されず利の爲に動ざる麗しき相を示されたり。

利風は人の身心を繫縛し身心を使役す。即ち經に心の爲に走使せられて安き時あることなしと。利に心の動かざるを剛者と云ふ。論語に孔子が我未だ剛者を見ずと。時に門人が曰く申振は剛者なるべしと。孔子云く振は慾ありなんぞ剛をえんと。いかに勇者も利の爲に動さるべきものはまことの

勇に非ず意志微弱なるものなり。

孔子易を読んで損益の卦に至つて喟然として嘆す。子貢問ふ夫子何の爲に嘆すと。孔子答ふ、夫自ら損するものは益す、自から益するものは缺く。吾是を以て嘆すと。此卦を見れば、自ら食欲を慎み功なくして祿を得、徳薄くして位貴き、また僥倖の財利、分に過たる名譽、ここには必ず禍の伏する處、此稱譽はこれ毀謗の兆候なり。

行蘊として衝動し來る伏せるサタンは、己が分限を忘れて、利欲名譽の衝動として己が分限を忘れ節度を超え、謙遜を失はしめ、眞面目を缺き、己れ一躍して顯要の倚子に登り登龍門の譽をえんとして眞面目なる努力を失はしむ。

有爲なる青年宿昔青雲の志を蹉跎たらしむ。古往今來行魔の爲に意志を侵され、天職の資性をいたづらに肉欲の奴隸となし、高き人格たるべかりしものをして空しく名利の奴となりて聖き道を誤らしめしものいくばくぞや數ふべからざらん。

一たび自己の意志の微弱にして無力なる、八魔のために障られて、自から菩提の成すべからざるを自覺し、一に意を歸して如來に歸命する時、靈性的の生活となり、常に如來の司導の下に行動し光に

靈化せらる時は、弱き者に偉大なる力を與へ、忍び難きを能く忍び堪えがたきに堪え易からしむ。光に靈化せられたる靈我が自己を支配する時に魔もいかんとすること能はず。

四念處に心は無常なりと觀ぜよと、實に吾人が肉我の心意は決して常然として不動なるものにあらず、まことに頼り難き者にぞ。朝に勤王の忠臣は夕には朝敵の名を買ふに至り、昨日は孝女として稱せられし女にも今日は仇し浮名の立つ身と變る。肉我はまことに頼み難し。

サタンはいかに剛かりし意志のところにも、靈の光のなき處には、サタンの力の侵入を妨げず。一切の人々を擧げて悉く聖賢たるを得ざるは、意志を侵すサタンの力に依つてなり。サタンの怪しき毒が人の心意に薰染せんか、念々サタンは胸臆に彷徨し、囊の青雲の志は忽に轉じて肉慾の奴隸となり賢人君子もサタンの爲についに小人凡夫に墮落す。サタンに感じたる意志の活動は燃るが如くに人の意に衝動す。

光明の増上緣によりて人の行蘊之に感ぜんか忽ちに轉じて心意の衝動は靈なる聖寵の火を點じたる我が意志の燈となりぬ。

聖光の點じたる意思を靈聖とは呼ぶ。聖火に燃えつゝある心念を靈的衝動と名づく。心光によりて

靈は復活し聖子となりてよりは日夜八億四千念々は自らつねに聖き火をして燃へつゝ、この光によりて吾人が靈はつねに燃ゆ。

識　　蘊　　魔

識蘊とは心理の智力なり。もと智力なるものは聖寵を被むるにもまた聖き道に進みゆくべきにも正智は最必要なるものなり。智力其ものは決して靈を殺すサタンにはあらず。然れども肉我は智力を利用して己慾を逞うせんとする其虚に乗じてサタンは智力に加はりて智力を悪用して正道を妨げ靈の生活を害せんとす。

ソクラテスが言ふ如く知は徳なり人全く眞知缺くるが故に不徳を行ふと。また彼は、我は自己の無知を識ると。全く己が無知を自覺する人は氏の如く、また孔子が知らざるを知らずとせよ是知るなりと。斯る眞知の光ある處は惡魔もいかんともすること能はざるべし。

しかれども古の人は己が爲にす。今の人は人の爲にすと、學問に於ても知識に於ても全く己を明に

し、自己の我を自覺せんとの知識にはあらずして他の爲にする知識教育なり。世の中の人の皆己を見るの明なく、己を識るの智なきが故に、世は悉く盲者なりと云やうな人には惡魔は其虛に乗じて其心に托して其人を狂ならしむ。然らざれば懦弱たらしむ。

知識が惡魔の爲に侵さるゝ時は傲慢偏屈自尊にして圓滿に人格を發展すること能はず。唯己のみ獨り尊大なりとして世を輕侮し衆人を見ること土芥の如し。佛在世に一の外道學者あり、己が智を恃み知識を誇り白晝に燈を把りて歩行す。人其故を問へば則ち云ふ我時に燈を把るは他にあらず、世は悉く闇黑なり、我獨り能く智慧の光を以て世を照すと。時に佛陀は彼が愚なるを救はん爲に、或商店の店員と化して、彼が自己の無智を自覺せんが爲に、天文地理等すべての及び内明につきての秘要を詰問せしに、之に答ふること能はず、遂に自己の無知を覺りて舉高の角を折つて佛陀に歸してつひに羅漢果を得たりと。

ソクラテスは常に學生が己が知識を恃んで舉高して節を失ひ身の分を過り有爲の青年をして空しく識魔の爲に過まりて生を誤るものを救ふこと急なりき。

ボウルゼンの倫理に曰く、人は高等の教育を受けても、其性質適せざる教育と其位地境遇の爲に運

用できぬ知識は全く價值なしと。己が能力已上の知識は人をして益愚ならしむ。唯知識のみを重んじ天賦の能力性質に適應せざる知識の結果不消化知識を以て判斷を攪亂し抑壓す。

ハックスレーが、人の痴愚は生ながらのものにあらずして、十中八九は父母教師が其自然の知的欲望を抑壓し、常に無味乾燥なるのみにあらず不消化なる、糊口に關する人間的欲望を絶えず生ぜしめんとするに由ると。斯る識魔には人の天性を攝すると共に生じ來る傲慢等によりて過度の教育は獨り知性を鈍くするばかりでなくまた感情を鈍くす。

人の教育と境遇との間に衝突起り、職業及び地位が從來受け來れる教育を利用せしめざる時は知識は彼を幸福にせざるあり。彼は自から不相應の要求を起して己が職業を快とせず、己が外圍に對して心地安からざるものとす。不當の教育ありて農事に従事するものの如き之が適例なり。徒らに世人には憚られ軽んぜられ、爲に己世間に對して心平ならず。自己の地位をもて己に適せざるものとす。斯の如き今日其幾何あるを知らず。男子と云はず女子と云はず、教育あるが爲に己が屬する階級より放逐せらるゝもの世間至る處に有るなり。彼等は己が自活の要求は其品位を墮すものとして爲に不快を感ず。

教育の進むに随ひて受けたる教育に個人及び社會的關係に適合せずして人をして不幸に陥らしむるもの毫も怪むに足らず。教育ある婦人家庭に風波を起したりしが、近來大學を出たる者往々其受たる教育の爲に糊口に苦しむ。是高等なる知識を得ることを學びて衣食を得る方法を學ぶに忽せにせるにより、彼等は斯損害を償はんとして力と欲望とを有するも、其教育は之を實現するを許さず。何を以て之を許容せざるか。曰く衣食の爲に手足を勞するは教育あるものゝ名譽を失墜する虞あるとすればなり。

知識のために識魔のために襲はれて知識は諸方面に於て向上の妨害をなし靈格たらざらしむ。

若し如來の心光に人の知力を照す時は、從來識を痲痺せしめた魔の中より覺醒し、すべての知識は眞理を覺り得る時は、人の智は神の前に愚なるをさとる。

肉の生活上に於て尙斯の如きの知識魔は人を誤らしむ。増して況や心靈の上に於てをや。故に人如來心光によりて全く己が無知を自覺し、一に如來に歸し、克己自剋自策して惡徳の源なる傲慢の闇をさり、一に如來の心光によりて覺醒する時は、無明の眠さめて人生の眞理をさとり、益聖道に向上すべし、實のれども虚しきが如く、苟しくも智者の振舞をせず、實に己はは無知無力なり、但如來の心

光によらずしていかでか聖道に進むことを得ん。

肉我は無知無力なるを自覺したる我に識魔もいかんともすること能はず、故に聖法然は愚痴に還りて念佛すべきをすゝめ、たとへ一代の法をよく／＼學すとも一文不知の愚鈍の身になして凡入道の無知の輩に同うして智者の振舞をせずしてただ一向に念佛すべきことを教ゆ。

心光加はる處に眞知生ず。眞知は智者の振舞をなす如き似而非智にあらず。大賢は愚なるが如し。賢哉回やと、回は終日言はず愚なるが如し。外面に智識を弄ふものは人の前の智は如來の前に愚なり。心光の中に益々進んで正智をえよ。

トルストイ翁がイワンの話に、イワンの愚には惡魔もいかんともすることは能はず。從弟の二人は私の智と勇とをたのみにして己を偉大のものと誇大舉高するが故に、魔はその便を得て彼等をみごとく墜落せしめたりとの譚、よく識魔の相を畫けるではないか。

増 上 縁

人の意志なるものは甚だ薄弱なり。一時の勇氣はいかばかり猛くはやるとも永久に意志の一定して持續する事は甚だ難し。孔子は白刃も履むべく爵祿をも辭すべきも中庸をば能くすべからずと云はれし如く、志は實に怙みがたしとするも、君子の君子たるは全く一時の感情的勇氣にあらずして永久に常たる意志の靈たる處に於てす。

すべての人をして自ら聖人と等しく中庸の意志として道德的の行爲に偉大なる勝縁の力を與ふるものは如來の心光増上縁による。世に平凡の意志をして薄弱ならしむるもの、人の心意を搖動するの動機甚だ多し。中に就て最も人心を動かす機會たるものに八あり之を八風といふ。

薄弱なる凡愚此八風のために意志をして鴻毛の如く左右せらる。八風とは何ぞや。毀譽謗稱苦樂利衰是なり。人の意志が天然の世界動機世俗情操の基礎の上に安立するものはいかにすともこの八風のために動搖せられることを免がれざるなり。人の天然意志は肉我を根として名と利との爲に執着し、

肉我は名利の二を以て生命とす。實なくも名譽を望み、勞せずして利あらん事を貪り、實にその淺劣なる情操實に憐むべし。名と利との爲に目のなき卑き者寔に傷むべし。彼等は斯二の爲に精神生命をまで忘れて、ついに心靈をして自ら獄火に葬り去らんとするをいとはす。

彼等は心靈により眞の如來の前に靈によるの名譽と靈の大利あるを知らず。唯眼前の仇し名利の爲に奴隸となることをいとはす。心光の増上縁を被らざるものゝ比々然らざるなし。人は譏譽褒貶のために己が意志を枉げても譏を遅け譽を得んことを望む。

若し人如來の眞理の光明を標準とする燈臺なからんか、人の精神生活の過程は大洋を航する航路に等しく航路誤り易し、八風はいつの間にか航をめぐらして方向を轉ぜしむ。人の意向たるや、平凡の人の意向なるものは苦を避けて樂に就ん事を求め、道を枉げ徳を破りても之に就かん事をのぞむ。また利の爲には他の利をも己に、害に對しては、自の害をも他に向はんことを欲し、斯八風は人の感情に激しき波浪を起し情操を動かして意向を俗情の動機に傾けんことを免れず。而して意志が主我を根底とせば、いかにすとも名譽と利欲の爲に動かさるゝことを遁るゝよしなし。こゝに到らばいかに知識たるも世の豪傑たるも全く主我を中心とする人には八風のために動ぜざる能はず。

天然の我意と世界動機とは野卑なる情操にて之六道流轉の凡夫なり。之を超越して、肉の我を超て如來の靈化の増上緣によりて、一たび如來光明界裡の人となり、我意目的の迷妄なるを認め、如來の終局目的に隨順して、益々向上して眞善美の極致なる靈界の彼岸に向つて行進するの意志と、眞理の終局に勇進して自ら之を以て眞理なりと信認する時は、世俗の譏譽褒貶も敢て意に介するにたらず。如來は神聖にして眞理の光なり。斯光明を標準とせずして極樂に到らんとするも決して能ふべきにあらず。

闇夜には燈臺ありて航路を過たざらしむると同じく、吾人は如來の光明を増上緣として終局の天國に入る。自から思惟せよ。吾人は是如來の光明によりて天國の靈港に入るの航路たる生涯たり。世の八風のため意志を枉げ目的を誤たば、いかでか眞理の極樂に入ることを得べきぞ。たとへ千萬悉く非難するとも、意志は眞理の光明を標準として勇猛に往進して敢へて躊躇せず。

人は港の燈臺を標準とせずして我意に隨はば、やがて必ず航路を誤り闇礁の憂なきを得ず。

人生の航路、如來の終局目的即ち靈界の彼岸に入べき標準たる如來光明の増上緣によらざれば、人々悉く我意自分勝手に、各自の目的を標準とせば闇黒の生活にして即ち三惡四趣の街にさまようなる

べし。若し人八風のために唯我慾肉欲を恣にして、邪見惡逆の方向に進まば、性格つひに奈落の底に沈むの悲あらん。私慾我慾の習慣は人をして餓鬼の業を成ぜしめ愚痴弊惡なると憍慢は人を修羅道に隨せしむ。

業の勢力

其人々の一生の業作の習慣性が鞏固に決定せるを業識と名づくるのである。さて個人の靈魂不死のことにつきては、カントが天國は理論には有とも無とも證明できぬけれども、實行の結果はなければならぬと言ひしが如くに、地獄や天堂は之を理論に證すること能はざるも、人の生涯の善惡の業識と其の業の勢力とは常に形骸かぎりとは云はれない。銃丸の火藥の勢力は唯銃中にとどまらざるが如く善惡の業力と習慣の性格とより見れば六道瞭然である。十界は其意志性格に顯然たり。

解 脫 の 要

衆生もと一大法身を根底とす。一大法身を離れて別に衆生心あるに非ず。吾人が知覺運動あるはこの精神なるもの即ち法身なり。

この全身法身を體としながら、衆生分々に身を受け個々に肉我を執して、特殊な我なりとおもへり。この肉我なるものは物質の規定に着色せられて、法身そのまゝを顯現せざるものの、本其中心は法身の分身なりといはざるを得ず。

法身はもと絶對的本體なり。然れども此肉我の爲に一大法身と我と分別を見る事に至りしは全く迷なり。佛教に於て最嫌ふ所は肉我を執して實有と執するにあり。肉我は本大我を離れて別に實體あるに非ず。

六大假和合の核を捉へて之を實我とおもへり。六大各々其元質に分つときは何の所に實我あらんと

之につきて、肉我、相待我、理想我、眞實我、

肉我はまた機制我といふ。此肉體は諸の物質の原子が聚合し、この身體の組織は悉く機關的器械的に規制せられて運動活用をなす。此機關士をさして我となす。我とは自由の義にして、自己の關する機關を任意に左右するの義、然るに此機關士自由を得る如くに自任するも、其實は生理に規定せられ因縁に約束せられて自由を得るにあらず唯此機關の運轉を或る範圍内に於て、自由を命ぜられたるなり。主人公すべての機關は我に幸福を與へ、この機關は快樂の器具として我は器關を備へ、快樂の主として満足得んとす。然るにこの機關なるもの眼に耳に感覺の欲を恣にして、營養も生殖までも悉く快樂の料に供せんとす。春夜の夢を食つて快樂を貪るにも其目的を誤つ時は、還て苦惱を加へ機關を損ふ。ついに何ぞ計らんや此機制全く快樂の機關にあらざることを。殊に老人の如き快樂を享受すべき器にあらずして寧ろ苦みを受くる器なり。

感情我。我愛執藏など云つて人の精神中最肉につき親しきものは感情なり。情は肉と最親密腦髓血肉及生理機能即ち我を執す。故に此肉血の純深なるは感情の麗しきとおもふばかりに此活氣血肉の活動と伴ふ感情を即ち我とす。之を愛するは生理の自然にして自家保存の必要から衝動する愛我なり。

顛倒の夢想

人生は快樂を目的とし、世界は幸福の満足せる舞臺との夢想は、事實に望んで現實に支吾し、三苦は人生をめぐりて離れず八苦は交々競ひ起りて隙なし。

是人生及び世界を顛倒して觀想せし結果なり。人生の眞意を解し世界の眞義を解し天則の眞理を認識する時に至て、始めて豫想の顛倒なるを覺らん。

世界は幸福のみ與ふる處にあらず、天則は我の爲に變ずべからざるを知らば幸福主義は争でか其目的を達すべきぞ。焉に於て幸福主義の顛倒をさと、主義を一轉する時は、理想に於て解脱の觀念を得。快樂幸福の顛倒を一轉する時、消極的に厭離穢土とす。世の幸福主義の迷なるを覺る爲なり。積極には世界及人生は快樂及幸福の爲にあらずして、克己精進、菩薩六度の道なり、布施正義耐忍勇敢慈悲等の。

苦惱は解脱に要あり。人苦惱なくば解脱の要なし。

衆生の顛倒

幸福主義と世界（うきよ）依屬とは衆生苦悶の因なり。全體人類は他の動物と同じ動物欲と進んで私の欲をもつてをる。人は生得に肉體を以て飽く迄に幸福を追ひ求め人生は快樂を目的として生れ來る如くにおもつてをる。之を佛は衆生は本來人生樂くないものに樂を食る性を樂顛倒と云ふ。生つきまちがつて居る、根本的に謬つてをると教へ給へり。人の肉體は快樂を享樂すべき器具にして現世界は快樂をうくべき舞臺と想ひ飽くまで形の幸福を追求めて止まぬ。然るに幸福は食れば食るほど得難し。凡夫が常に前途に快樂を熱望して接近して見れば眞の價値は得難く、喻を以て渴きたる鹿が遠隔の地にかげろうを見て水ありと想ひ接近して見れば實に水にあらざるが如し。肉の快樂を追求むる凡夫、鹿の如くにして、之は食るに隨つて只不満と不足を感じるのみ。

若し人生の眞理を自覺せざる者衆生相共に闇黒の中に己のみを厚うせんとして自覺せざる衆生は八

苦に逼らる。八苦とは生、老、病、死、哀別離苦、怨憎會（をんぞうゑ）苦、五蘊盛（うんじやう）苦、求（ぐ）不得苦とである。先づ第一生の苦。生存競争の苦、相互競争場裏にある相を經に、

世の人民より蠕動（ねんだう）の類に至るまで動物共通の惡は生れながら有つてをる。衆惡を爲さんと欲し皆然らざるはない。強きは弱きを伏し轉た相剋賊（そこなひ）し殘害殺戮（せめあい）して迭（たがひ）に相吞噬（かみあひ）し。己が力の及ぶ限りは吞噬（くらは）んと欲す。

此競争は一切階級に通じて同じく然り。鼠は猫に噬まれ、猫は犬に殺され、勞働者の膏血を絞つて富豪の膳に供し、其形に於てこそ差あれ、相吞噬すると云ふ意味に於て相異らず、其富豪者と雖ども精神に入つて見れば無量壽經に示し給ふ如く、

世人此劇惡の中に於て勤身營務（みをこに）して自から給濟（まうけ）す。尊も卑も富るも貧きも少長男女共に錢財の爲に憂思（しんばい）適（まさ）に等し。屏營（をどく）として愁苦（くるしみ）して念（おもひ）を累（かさ）ね慮（しんばい）を積み心の爲に走使せられて安き時あること無し。田あれば田を憂ひ宅あれば宅を憂ひ、乃至一切衣食什物資具類に至るまで、之が爲に憂慮（しんばい）せざるはない。憂念愁怖（しんばい）する内に、若も非常の水火盜賊また怨家債主（かたきかしぬし）の爲に焚漂劫

奪（うばひとり）せられ、消散磨滅（なくなる）の曉には、憂毒胸中（きがふさぎ）に松々（うつ／＼）として憤を心中に結び、心に堅く結ばれて解くる時有ることなしと。

同經に相互親怨常なく人情の頼み難きを、

世間人民父子兄弟親屬等が相ひ敬愛し合て互に憎嫉（にくみ）すること無き、金錢等も有無融通（うむゆうづう）して貪惜（ものをしみ）を得ず、言色共に和して相違戻することない。然れども一朝情に逆ふ時は忽心諍ひて恚怒（いかり）するあれば、今世の恨が後には劇く大怨と爲るに至ると。

哀別離の相を経に、或は父子の爲に泣き或は兄弟夫婦更相に哭泣す。一は死し一は生じて更に哀慙し、恩愛の情忍び難く、憂念結縛（うれひむすばれ）し、相顧戀（あいしたひ）し年月をふれども心に開明（ひらけ）せず。情欲（よく）を離れず。昏朦閉塞（こゝろくら／＼）して愚惑（をろかさ）に覆はれると。

また世の人は闇黑の中に埋没する痴漢（ばかもの）を慇懃（こまめ）み、人生自ら熟（つら／＼）ら思ひ計つて心端正（まつ／＼）に專精（つとめ）はげんで、道を行じ世事を決斷（きまりつける）すること能はず、便々として可惜年壽（あたらし）を盡し、幾年経れども道を得ることなく、總猥憤擾（なんとかかんとか）して愛欲を貪ばり、道に惑ふ者は衆く、之を悟る者は寡（すくな）し。世間怨々（そは／＼）として憐頼

(あてに)すべきなし。高卑上下(みぶん)の別なく各々殺毒(わるいち)を懷き惡氣窺冥(にくしみ)にめぐらみにして妄に事(あらそひ)を興さんとす。天地に逆違(さからひ)し人心に順はず、自然の惡非(あく)先づ隨て之に與(くみ)す。恣(ほしいまま)に所爲(おこなひ)を聽(わがま)にして罪の極りを待つ。と。

まだ人生の光明に接せず、如來の中に安住することなく顛倒の中に世界の榮華に懷がれつゝも世界は彼らが満足を與へぬ。身老れば身體の生活機關も老朽し憔悴(やつれ)し四大衰損(からだおとろへ)し四支(てあし)は自由を缺のみにあらず、前途の希望も閉塞せられ、世間にも疎外せられ、或はまた病痾の爲に呻吟し疼痛になやむのみにあらず、前途を悲觀し希望は挫折せられ種々の苦悶は競ひ起る。死を求むも得ず、生を求むるも得ざるなり。世に在りて順境に在れば榮花に甘へ榮耀に誇り自ら得たりとし他を輕しめ專精に道を求めず。事蹉跎して逆境に陥らば忽ち落膽失神世を恨み他を咎め只悲觀冥沒して生き乍ら神(こゝろ)は惡道に沈淪して自ら獨り闇に迷ふのみ。世人誰も敢て代るものなく、世界の規定は毫も彼らに特典を與へぬ。年命は暫らくも停らぬ。翠黛(まつくろ)の髪は忽ちに蒼白(しらが)と變じ紅顏何時か白骨と爲る。

人生を顛倒して幸福主義で世界を快樂の舞臺と誤解したる人生の末路實に哀むべし。

顛倒より醒めて絶對の安住を求む

佛陀の教ふる所に隨がひ、人は生得樂顛倒に墮すれ共元來此身體は快樂の器具にあらず。此世界は肉の幸福を與ふる舞臺に非ず。之に於いて宗教に依つて此顛倒より醒めて眞面目に安心の常住なる安心を求む。人生は高等なる目的あり。世界は吾人を永生に入るべき手段の修行の道場と自覺し來る時に、初めて樂顛倒を脱し從來の世界依屬心を轉じて絶對に依屬する安心を起す。

若し天台の教に依れば、凡夫の顛倒より醒めて永遠の安心を得るに四教（四階）あり藏教、通教、別教、圓教。

若し藏教によれば生滅の四諦と云つて凡夫の生死の苦は實に苦である。生死の苦の因は集（じゆ）と云ひ、凡夫の生れながらもつてをる罪惡の源なる煩惱である。此煩惱を斷するには生死は苦であることを認めて苦の因の煩惱を斷する。生死を超たる處に眞實常住の涅槃の常樂あり。此常樂に到達す

るには三十七道品の道を修めなくてはならぬ。此道を修すれば必ず眞空の涅槃を得て初めて安心できると。

次に通教によれば無生の四諦と云ひ、凡夫の生老病死の苦と云ふも凡夫が迷て苦と感ずるものゝ實は夢幻のやうな物で、悟つて見れば生死の苦と曰ひ涅槃の樂と云ひ何れも昨夜の夢のやうなので、凡夫の夢の中にて苦と想ひ醒めて見れば苦もなくまた樂もないと覺るのが通教の四諦。

別教は無量の四諦。この教は更に高尚で遠大で、苦にも無量あり。地獄より佛界に至る迄果同じからず。即ち苦の因なる煩惱も亦無量である。無邊の煩惱誓つて斷すべきである。道にも無量恒沙の佛法あり。法門無盡誓つて學知すべきである。滅に無量無上の佛果悉く證すべきである。

圓教は無作の四諦。佛の眞實の覺より見れば、今此五陰の身も心も見ゆる眼も見ゆる物も實は悉く眞如の現れである。して見れば生死の苦と云ふもない實に眞如から因縁に隨つて出沒變化する。眞如が縁に隨つてかはる迄のこと故に、苦と云ても本眞如なれば捨つべきものでない。無明と云ひ煩惱と云ひ實は體は菩提と云ふ覺りなので、まだ目覺めないから煩惱として居るけれども、煩惱が覺て見れば此心が即ち覺りなのである。故に此心を斷切て仕舞へば覺の心が失る。故に邊邪皆中正なれば、道の

修すべきはなし。斷見とか常見とか云ふも見の心の本が實には中道なので正見であるから道を修して出来るものでない。道の眞理は本々まづて居るものである。生死即涅槃なれば滅の證すべきなしと。生と死との本體は生でも死でもない。本來常住の涅槃から出沒してをる故に、寂滅とて別に證すべきものでないと、かやうに生死の本源に覺入つて見れば、其本體は絶對平等の如來法身を離れてない。其本體を知らず凡夫の迷の眼から皮表から種々に見てをるのであると。

光明主義の四諦

圓教の無作の四諦の理は先に述べた。凡夫が佛に成ると云ふも其實は本々無作の三身が自己に具有してをるを佛法の修行にて顯はすまでのこと。寶石に本來具有せる光を琢磨して發するので、本自己に無きものを更に造り出すのでない。永恒の生命なる涅槃の性も本自己の本性に伏在してをるのを顯はれるまでの程は生死の苦と感じてをる。若し自己の奥底の絶對の生命が顯れ來れば生死の體が實は涅槃である故に恐るべき生死も無しと悟る。處で若し全くこゝに至れば諸佛の住し給ふ所に安住する

のである。

今光明の四諦にて、我が感情は生に悩み、死に苦しみ、すべてに憂悲苦悶の凡夫が、いかにして分に安穩の心に住す處が得られやう。吾人は自己の生死の源を悟ることはできぬ。然れども彌陀を信ずる處に自ら生死の凡夫が煩惱具足のまゝに彌陀大光明中に安住することが得らるゝ。大光明中とは即ち涅槃界、光榮と靈福とに満さるゝ處である。

實を剋して云はゞ、我らが人生に生死の苦を感じるに至ればそれは如來の恩寵である。此煩悶は我ら愚なる衆生に永遠の安樂の要求を催す警告である。例へば身體の局部に創傷にて出血する時は忽ちに痛苦を感じず。此痛苦の警告なかりせぜ創傷より多量に出血して甚しきは生命をも危害に及ぼすに至る。病苦を感じて初めて創傷の治療をうくるに至るは是痛苦は自然が生物の生命保護の警告である如し。吾人の宗教心に於ても亦然り。若し生死の苦を感知する警告なからば、吾人の愚昧なる如來の靈力を信賴して永遠常樂を要求するの眞理を諦信する由なし。我らは頑是なき小兒なり。如來てふ大慈父によりて自己の生死憂悲苦悶の肉我を脱して新き靈の生命に復活する心が決しておのづらは發るものでない。それを慈父の光明中に眞實の安心を得せしめんとするのが慈父の恩寵である。

吾人が天性の朴素なる、肉の快樂主義に耽着して自ら覺りて生死本涅槃の理を悟るべくもあらず。依つて生活の難、死の懼、種々生理的の恐怖憂悲を感じしめて、初めて如來の光明を求むに至る。如來の光明に依りて信心覺醒して初めて眞實の安穩が得らるる。眞實の安穩は肉の上に求むべきに非ずして精神的に求むべきの眞理なるを識るに至る。實は現實界は我らが肉體の要求する幸福を満足させる舞臺にあらず。生得の肉の幸福主義の顛倒なるを自覺すると共に、此世界依屬の眞理に非るを知り絶對的に依屬すべき如來に歸命信賴す。

人生の煩悶は如來の恩寵

人生否生死問題に就て煩悶が發るに至らば是即ち如來より我等衆生なる子らに對する慈悲である。是宗教を要求せしむる自然の豫備である。人間已下の動物は暫措き人類即ち頭腦の發達したる生物では、精神に於て心機一轉すべき機會を與ふべき準備として、人生の歸趣に對する生死問題に對する天より一の謎がかけらるる。曰く、我人生は何を目的として活るものなりや。一個の飯袋子(めしぶくろ)

を保存する爲にかく齟齬として此活る路を取る爲なる乎。人生かくの如き價值低き物なり哉。實に此謎に對しては教祖釋尊さへも凡位太子たりし時に痛く頭腦を悩まされし譚がある。此人生の謎は天の慈父より子らに對する試である。此謎の解決が人生の價值を定むる定木（ぢやうぎ）である。可惜青年時代に唯肉の快樂を以て主義とし口腹の欲を恣にし青春の血を只動物慾に漲し肉欲の満足をして自ら足れりとなすが如き族は、人生行路を闇黒に向つて居る動物の行路に墮落せる輩である。此に於て百尺竿頭に一步を進めて教祖の太子たりし時の如き肉の幸福を顧るの暇なく、蒼天無窮の中に永遠の光明を發見せんとして、金剛の意志を以て突進せんとする大人志幹の志こそは實に絶對的の安住處に趣向する士である。青春の血に漲るべき胸の奥底に潜在する最も堅く密封せるあり。この寶篋を開く爲に自己のすべてを犠牲にせんか、漲る青血の中に肉の快樂を以て満足とせんか。是人生が光明と闇黒とに分るゝ分岐點である。

惡質脫却の光明

人間には生死の苦惱あり。此苦の原因は人々罪惡の源たる煩惱を具して、罪惡の薪あるが故に生死の苦惱の火は盡くることなし。靈のことにつきては明無く、自ら生の從來する所を知らず、死して趣く所を知らず、くらきより冥きにさまよふ凡夫なり然らばこれらの苦の解脱を求めんには絶對的偉大なる力を有する如來に歸命信賴するの外に途なし。

宗教は人生の冥を照す光明。

また人類を苦惱より救ひ出す力なり。

人は人生無明の中に生れ、冥より冥に入り、自ら生の從來する處を知らず、死の趣向する處を知らず冥より冥にさまよふ。之に對して此心の無明なる人生に一道の光明を與ふものは眞の宗教なり。人生八十年の旅びには悲慘のこと苦惱多し。こゝに於て大なる安慰を與ふは即ち如來の大慈悲なり。

人には肉慾等の意志、自分勝手の惡質ありて煩惱の爲に罪惡を作り人格を墮落せしむ。

人の惡質を脱却して聖靈態に意志を靈化せしむるものは如來の光なり。宗教とは一言に云へば絶對的偉大なる如來の光明と衆生心との投合一致し衆生の心の無明と罪惡と苦惱とより救はれて光明の中に聖き心の生活を得せしむるものなり。

靈光反映

吾教祖釋尊無量壽經を説くと欲するときに臨んで、「爾時世尊姿色悅豫し光顔巍巍として威神極りなし」とは教祖が彌陀三昧の中に彼の靈光に感接し内容に充溢せる妙貌が自づと外貌に現はれて其反映として、阿難を感じしめたり。實に今日世尊が姿色清淨にして光顔巍巍たる、鏡の表裏に暢（とお）るが如しと。

いかに教祖が容に感じたる觀念の度の深さと廣さとはいかばかりぞや。此時教祖が精神的形式をして衆生に示現しなば盡十方無碍光如來盡空界重々無盡の莊嚴海を顯現す。これ教祖が我らが爲に彌陀に對する感合の内容を先づ最初に示され給しものなり。

人も主我幸福主義の惡素質を脱却の精神彌陀に融合し安立せる時は、清淨安樂自在常住の眞理の靈界に精神安住するが故に、八風の爲に動搖せられず、苦も憂も感するに足らず。

知情意の垢

人に三垢あり、即ち

智力垢—不正知見（わるぢゑ）

身見。果報の上にあらはれたる依身を我と計す。

邊見。靈魂は斷滅すとかまた常住とか一邊を執す。

邪見。因果を撥無す。

取見。劣を取して自ら勝と計す。

戒見。非因を因と計し、非道を道と計す。

肉慾—眼耳の慾、營養生殖の慾を貪り不攝生放蕩等をなす。

貪慾

我慾—我意を張りまた己のみを厚うして他に害を與へることをおもはず我見我愛等なり。

心情垢

瞋恚

非理又いかり。

愚痴

事理にくらく己が非なるも却て他をうらみ、迷ひ愛すれば惡きをも惡しと感ぜず。憎めばよきことをもよく感ぜず。みな迷なり。

我慢

増上慢。卑下慢等あり。

惡意地。

非道德方面に向ふ情操

意志垢

我執。

主我を主張し世俗幸福主義

卑劣。

世俗情操は卑劣にして主我幸福を貪り高等なる聖靈態菩提を汚す浮世執着

世俗情操を―聖靈態菩提心に、世界的動機を―上求菩提願作佛心になすが光明なり。

世俗的情操といふて人の天然は意志の垢ありて神の神聖態に適應ぬ惡素質あり。譬へばもと眞金の鑛垢の中にある如く、之を除き去るに非ざれば金性を顯はすこと能はざる如く、如來性が諸の煩惱野卑の垢に覆はれて神靈態を覆ふ。未だ高等なる宗教によりて精練せざるものゝ情操は高尚なる理想もなく神的志節なく寔に野卑なる人間的情操をいづること能はず。

世俗的動機

娑婆執着と名づけ浮世に執着して意志が欲望する處感覺的欲望にして、或は名譽權威を貪り利を求

め榮華を望み、この現世物質界を超へて目的を心靈界に求め望を神の國にいたすことを欲せず。況や願作佛心に於てをや。

我執

主我執著（みびいき）なり。人は本能幸福主義なるが故に之を恣にして生育するとき是我慾のみ主張し自に利あらんかぎりは飽までも欲望し他を安じ衆と利を同ふせんと欲するの志なし。

之を意志の垢と名づく。此靈光によつて天然意志の垢は是皆なみだの意志に適せざるものとして排除するは消極の方面なり。

此光によりて從來の天然精神を超越して道德力行をさはるものを除かば自由意志なり。是よりは意志を二面とし自己と彌陀の意志となり。自己は惡の本なるを以て常に自己離脱の自克につとめ、彌陀の意志實現に進むべし。彌陀の意志とは神靈態。この神靈に化せんが爲に常に意を注ぎ靈化すべし。靈化といふも極めて鞏固なる道德に外ならず。

意志の垢即ち彌陀の神靈態に適せざる惡素質脱却すれば彌陀の神聖同化の意志として鞏固なる道德態となり来る。即ち善心生ず。

意志の垢を排除して靈格を成さんと欲するには勇猛なる意力を以て之を碎礪せざるべからず。譬へば鑛垢を去つて金性を顯はすが如し。天然の自己は鑛垢にして靈態は眞金の如し。世俗情操と世界幸福執着をみな破り利己主義を排除せんが爲に、十二光の聖徳に意を注ぐ。この聖光は悉く我等を靈化せんが爲の光明なれば、この彌陀の觀念を實現せんが爲に欲する願望。この道德的動機の最上衝動を道德的情操と名づく。この願望を道德的最上衝動とは即ち聖靈態菩提心なり。菩提心とは即願往生の心なり。願往生心とは願作佛心なり。願作佛心とは願度衆生心なり。是上求菩提下化衆生の心常に彌陀に安立せる精神彌陀の圓滿なる意志實現として行動し自己が彌陀に神聖化せられる如く一切の衆生を悉く彌陀に攝化同化せられんことを願望し、衆生をして之に同化せしめば精神的安寧を得べし。

彌陀の靈化の意志は神聖正義忍辱勇猛一心寂靜謹慎精進智慧等となりて活動す。慈悲正直清潔清廉節操正語溫柔恭儉。

圓滿なる至高善は獨阿彌陀尊のみ。彌陀尊の至善は之を知ること能はず。超人間なるを以て之を寫象すること能はざれども、教祖釋尊の人格を以て彌陀の意志實現として生活々動せるを以て、比例して超人格の統一せる彌陀尊の至善をするのみ。教祖は世俗的情操世界的動機主我執着已に脱却して人

格としての圓滿なる彌陀靈化の意志として生活したまへり。彌陀は主我的幸福を脱しての精神的靈福。一切をして普く安寧ならしむるにあり。

善とは人は惡素質垢を脱し充分に精神及び身體の諸能力を發展せしめ人類を悉く安寧ならしめんと
の意志なり。人間最深の機能まで發展せしむる時は自己に安寧を得るのみならず他の關係も益々親密
ならしめ人格としての圓滿なる精神生活を得らるゝにあり。

炎 王 光

一切衆生同一の法身なれば、終局目的としては絶対に同化し、絶対に眞理なるが故に、衆生根底
を彌陀とし終局を彌陀とすると同時に、一切衆生には斷盡せざるべからざる惡素質必然的に具備し、
之を斷盡せざるべからず。

一切衆生の惡素質を斷盡する機能を炎王光と名づく。

炎とは實に其功德の猛にして且つ激に非ずや。斯く感じ易き御名を以て聖德を彰はしたまへども、

之を意にせず、空しく終身罪惡の皮殻を脱せざるのみならず、其皮殻の中に安んじて自ら足れりとするが如きは傳染病毒を燒盡さずして衆人を殺毒するの理に異ならんや。

炎王光の本質は絶對理性、即ち至眞の理體に、大智慧光明ありて、一切衆生を同化すべき恩寵なり。絶對理性の大智慧の光明に對すれば、すべての無明および業障はもと迷妄にして實體あるものに非ざるを以て、譬へば日光東天に昇る時忽ち黒闇を滅消するが如し。

黒闇態は黒闇の時には實體の如くなれども、光明に對せずして其體を認ることなきが如し。無明および煩惱業障等は迷の中には實在の如くなれども、眞理に對すれば實體なきが如し。

斷盡すべき惡素質。

若し惡素質脱却し去らば、其體は至眞至美至善の精神態なり。之を覆ふ所の素質は無明煩惱と罪障となり。

三障。煩惱障と業障と罪障、又は惑と業と苦とす。煩惱に二種。見惑と思惑とす。見惑とは知力が眞理を知理するに覆ふ所の惑にして至眞即ち佛知見の障りなり。

思惑とは先天的にして天然性格に出る欲望にして、天然の幸福主義なる肉慾と主我主義なる我慾と

なり。肉慾は榮養生殖等の及び色聲香味觸の五官感覺的欲にして、我慾とは榮耀名譽威權等及び名利のための利己主義にして、他の利害をも顧みず、自己の強度の慾を主張し主義とし目的とせる欲望等なり。

此我慾に適する時は貪り之に反すれば瞋恚を起し眞理に迷て（ ）の如きはみなこれに屬す。

業障とは普通慾望に加へて、若くは宿業よりの性格過去に作りし惡業により惡慣習より加へたる特殊の性格に出る惡と苦毒により、遺傳慣習なる精神病的變質にして、惡習慣が襲ね來れば二代三代には遺傳的惡性格となりて、先天の惡弊なるあり之を業障と云ふ。先天のみにあらず後天に惡作は悉く之を改悔せざれば惡弊症となるに至る。

罪障とは自ら意思と言語と身の行爲とに十惡等の罪を作りたるなり。殺生偷盜邪淫妄語綺語惡口兩舌貪欲瞋恚邪見等の十惡業、內邪見にして外三業に惡業を造作す。之すべて罪障とす。

衆生惑によりて業を起し業によりて苦を受く。

至心に歸命して彼の靈光に接せば三障の素質消滅せんこと譬へば大火聚の萬物を焚燒するが如し。此炎王光に觸るゝもの三垢消滅し神靈同化せざるものなし。